

西行櫻 物語『雲玉集』に、昔西行法師が西山に住みける時、花のもとに白髪シロカミの老人あらはれて、

罪科ツミカは、いかゞあらしの山櫻、ながむる人のわがみやま木を、と、花見に來し人の歌に返し、て失せけり、花の精なるべしとあるを骨子として、花の精が人と化して夢中にあらはれしと、問答するさまに作れり、

盛久 『長門本平家物語』に、平家の侍主馬の盛久、囚れて鎌倉に下りし時、日頃信仰せし觀音の力によりて、ゆるされし事を骨子とし、夢に觀音が未來心安く思ふべしと、示現せることを述べたり、

清經 『盛衰記』に基き、清經平家の衰運を嘆きて入水せし當時を、魂魄が夢にあらはれて物語る趣きに作れるものなり、
鐵輪 『太平記』に基くものならんともいひ、或ひは當時の風俗を

寫して、勸懲の意を寓したるものならんともいへり、夫に捨てられし女が、嫉妬の餘り鬼となりて、夫を取殺さんことを貴船神社に祈りけるに、明神宮司の夢に示現を與へしと共に、その夫の夢にもあしきことを見たることを述べたり、

井筒 『伊勢物語』筒井づゝの歌の一段を取りて作れり、

(三)神佛ノ縁起ヲ材料トセルモノ

三輪 『舊事本記』(國史大系第七卷)に、大己貴神が活依玉姫に通へることを記せるものと、『江談抄』に、玄賓、洛陽を去つて他國に行く道にて、女にあひし時のことを記せるとを取り來りて、三輪明神女に化して、玄賓僧都の夢にあらはれ、神代の昔を物語り、三輪の社の縁起を説く、

道明寺 これ同寺の縁起に基きて、尊性が善光寺に參籠して、如來の靈夢の告げを受けて道明寺に參りしに、こゝにて白太夫

の神の靈夢にあらはれて、天満宮の昔物語をなし、舞樂の役の一に當てられて舞ふことを作りたり、

當麻 中將姫が尼となりて、眞の彌陀を拜せんと一心をこめし時、化女來りて曼陀羅を織りしことを骨子とし、その古の化尼、化女が夢中に現じ來りしことを記せり、

(四)神佛ノ靈驗ヲ材料トセルモノ

老松 梅津某が靈夢を受けて、九州安樂寺に詣で、老松の蔭に旅居して神の告げを待ち居たるに、老松の神夢にあらはれて、天満宮の神託を知らずる趣きに作れり、

三井寺 愛兒を失ひし狂女が、睡眠の中に靈夢を受け、三井寺に詣でて佛の助けによりて、夢中に子に逢ふことを寫せり、
丹後物狂 岩井某が、橋立の文珠に參籠して祈りける夢に、靈驗ありしことを記せり、

遊行柳 柳の精が夢にあらはれ、遊行上人の法力によりて成佛すること記せり、

(五)歴史上ノ事實ヲ材料トセルモノ

吳服 應神天皇の朝、工女アヤハトリ、クレハトリの二人、來朝せる歴史上の事實によりて、神の告げを待てる所に、姫二人夢に人の形をあらはして、機を織り昔を語り、當代を祝すること述べたり、

賴政 夢のちぎりを待てるに、幽靈出で、歴史上の事實即ち賴政の生前を物語る、

生田敦盛 敦盛の子靈夢を得て、その告げに従ひ生田森へ下り、父の亡靈にあふよしを述べたり、

八島 死者の幽靈あらはれて、生前の夢物語をなす、
忠度 これも亦八島、生田敦盛と同じく、生前を夢に語るよしに

作れるなり、

伏木曾我 大磯の虎といふ女、十郎の墓に詣て、夢の契りを待ちけるに、亡霊出て、仇討の物語をなすよしを述べしなり、

(六)死者ノ霊ヲ材料トセルモノ

松風 行平中納言が、須摩にて愛せし姉妹の海士の執心、去りやらずしてその幽霊夢にあらはれて、昔を語り回向を望むよしを述べたり、

水無瀬 出家せし父、己れが子の家に宿り、亡せし母の後世を吊ひしも、親子の實を明かさざりしとて、母の亡霊夢にあらはれて、遇はすることを述べたり、

(乙) 曲ノ形式

(一)「シテ」能曲ノ主人公自ら夢みんとて枕に伏せば、忽ち夢境に入るもの、

邯鄲

「ワキ」「シテ」「ツレ」等各夢中の人物となりて演じ、地「詞」を以てその間を補ふことは、能曲の常規なれば、以下別に示さず、

(二)「シテ」が亦夢の本體にして、始めより人となりて「ワキ」の夢にあらはれ出て、語るもの、

遊行櫻

(三)「前」シテ「初めに人とあらはれて消え失せ、再び生前の形をあらはし、後の「シテ」となり、夢にあらはれて物語るもの、

忠度

(四)「ワキ」「ツレ」の夢に「シテ」が夢の本體をあらはして物語るもの、

夕顔

清經

當麻

半菰

吳服

松風

道明寺(前半、序)

水無瀬

(五)「ワキ」或ひは「ツレ」其他のものが、夢の契りを待つうちに「シテ」が

夢の本體として現はるゝもの、

頼政、生田敦盛、老松、(後半) 八島、

(六)前「シテ」が「ワキ」の夢にあらはれて物語る内に、忽ち後「シテ」となりて名乗るもの、

落葉、雲林院、(後半) 項羽、井筒、

(七)前「シテ」消えて、「ワキ」が夢を待つ所に、後「シテ」(夢ノ本體)となりて物語るもの、

伏木曾我、

(八)神佛を祈りて夢中に示現を受くるもの、

(イ)祈レル、自身「ワキ」又「シテ」ノ夢ニ示現ヲ受クルモノ、

盛久、丹後物狂、(前半) 老松、(前半序)

(ロ)他ノ人ノ夢ニ示現ヲ受クルモノ、

鐵輪、

(九)常に「ワキ」が愛讀せるものゝ内容中の「シテ」が、後の「シテ」の前化身として夢にあらはるゝもの、

雲林院、(前半序)

(一〇)「ワキ」の夢に自ら現はれしものが、直ちに「シテ」となりて事實に移れるもの、

張良、

(一一)「ワキ」の夢に「シテ」(夢ノ本體)現はれて物語り舞ふもの、

道明寺、(後半)

(丙)内容

(一)死者の幽霊あらはれて、生前の物語りをなすもの、

(イ)只夢ニアラハレテ物語リ、後消ユルモノ、

八島、(八島合戦ノ當時ノ狀)

清經、(入水シテ死セル心事)

頼政、(平等院ニテノ最後ノ狀)

項羽、(最後ノ狀虞氏トノ別レノ當時)

生田敦盛、(子ニ遇ヒテ源平合戦及ビ最後ノ狀ヲ語ル)

井筒、(業平ト紀有常ノ息女トノ關係ヲ語ル)

水無瀬、(亡キ母ノ靈、親子ヲヒキ合セテ冥土ニ歸ル)

伏木會我、(富士裾野ノ狩場ニテ、仇祐經ヲ討ツ時ノ狀)

當麻、(中將姫、當麻曼陀羅ヲ織ル時ノ狀)

(ロ) 妄執ノ念、佛果ヲ授カリ、成佛シテ消ユルモノ、

夕顔、(夕顔ノ妄執、僧ノ吊ヒニヨリテ解脱ス)

落葉、(雲井雁ノ嫉妬心深カリシガ、佛果ヲ授カリ成佛ス)

(ハ) 妄執ノ念、回向ヲ望ミテ消ユルモノ、

松風、(行平ノ須磨ニテ愛セシ姉妹ノ海士ノ妄執、回向ニヨリ成佛セン

コトヲ願フ)

(二) 植物の精のあらはるゝもの

老松、(老松ノ神靈、天満宮ノコトヲ語ル)

西行櫻、(櫻ノ精、草木國土悉皆成佛、櫻ノ名所ヲ語ル)

遊行柳、(柳ノ精、遊行上人ノ法力ニヨリテ成佛ス)

忠度、(行暮れてノ歌ノ千載集ニ載リシ事情ヲ語ル、コ、ノ夢ノアラハ

レ方ハ、少シク趣キヲ異ニシ、木ノ精ガ即チ忠度ノ靈ニシテ、ヤガ

テ復タモトノ木ニカヘル)

半菰、(コレモ夕顔トイフ名ヨリ、夕顔ノ靈ハ即チ花ノ精ニシテ、源氏ト

ノ關係ノコトヲ語ル)

(三) 夢に神佛の示現を受くるもの

老松、(前生) (梅津某、北野ヲ信ジテ常ニ參詣シ、我ヲ信ゼバ安樂寺ニ參レト

ノ靈夢ヲ蒙ル)

吳服、(西宮ニ參リテ、工女ノ吳國ヨリ來レルガ、二人形ヲアラハシテ

鐵輪

綾錦ヲ織ルコトヲ夢ミル

(夫ニ捨テラレテ恨ミ遣ル方ナク、貴船社ニ參リテ鬼ニナシ給ヘト祈リシ甲斐アリテ、宮司ニ靈夢ノ告ゲアリ)

鬼になりたきとの御願にて候ふ程に、我屋に歸りあつて、身には赤き衣を着、顔には丹を塗り、頭には鐵輪を戴き三つの足に火を燈し、怒る心を持つならば、忽ち鬼神と御なりあらうずるとの御告にて候ふ

三井寺

(愛見ヲ失ヒシ狂女ノ睡眠ノ中ニ、我子ニアハント思ハレ、三井寺ニ參レトノ靈夢ヲ蒙ル)

道明寺(後生)

(如來、汝念佛往生の志誠に懇なり、然らば五畿内、河内國土師寺は天神の御在所なり、彼所に神明を始め奉り七社の神々を勸請申されたり、又天神は一切衆生、現當二世の爲め、五部の大乘經を書き、供養して埋まれたり、其軸より木樾樹の木、生ひ出てたり、其木の實を取り數珠とし、念佛百萬申さば往

生疑ひあるまじト告ケ賜フ

丹後物狂

(文球ニ子ヲ祈リシ夢ニ、松ノ枝ニ花ヲツケテ賜フトアリ)

盛久

(觀音、本より大慈大悲の誓願などか空しからん唯一音なりとても我を念ずる時節の、王難の災は遁るべし、况んや汝年月、多年の誠を抽んで、發心人に越えたり、心安く思ふべし、我、汝が命に替はるべしト宣フ)

(四)神が人とあらはれて語るもの

三輪

(三輪ノ明神、里ノ女ト爲リテ玄寶僧都ヲ訪ヒ、終ニ神ノ姿ヲアラハシテ神樂ヲ奏ス、三輪明神ノ縁起已ニ述ベタリ)

[雜例] 以上分類せし外に、夢買、夢占等に關するものあり、こゝに

雜例としてその一斑をかゝぐ、

(イ) 夢買人

○昔備中國の郡司の子に、「ひきのまき人といふあり、夢を見て合

せさせんとて、夢ときの女の許に行きて夢合せて後、國守の御子太郎君入り來りて、夢をしかと見つるなりいかなるぞと語る、女聞きて「世にいみじき夢なり、必ず大臣までなりあがり給ふべし、必ず人に語り給ふな」と申しけり、其時まき人女に向ひて、夢はとるといふ事あり、この君の夢我に取らせ給へ云々といへば、女さらばおはしつる君の如くにして入り給ひて、その語られつる夢を、露もたがはず語り給へ」といへば、まき人喜びて、かの君の如くにして入り來り夢語をしたれば、女同じようにいふ、後まき人は果して大臣となりしが、夢取られし守の子は、司もなきものにて止みにけり、

宇治拾遺物語 一三卷

◎北條時政の長女政子の、尙ほ其家に在りし頃、其妹一日夢みる所を語て曰く、前夜夢に富士山に登りしに、周圍に雲霧なく、麓には櫻花、桃花の美しく咲くを見たり、此何の兆ぞと、政子は其夢の

美しく且善きことを思ひ、妹に謂て曰く、御身我に其夢を給はるべし、然らば我よりは好き衣を與ふべしと、妹は之を諾し、夢と衣とを交換せり、政子は其夢を神の如くに大事にし、燈明や御酒を供したり、其時頼朝は北條の家に滞在し、時政の幼女の非常に美なるを見て氏と結婚せんと欲し、婚約將に成らんとして、幼女は餘りに美にして、反て長女の自己に適することを思ひ、政子に艶書を送りたり、政子は之を容れて結婚し、後年の將軍の夫人となれり、

(古本會我物語)

(口)夢占

◎盛安鎌倉に下りて、八幡神が頼朝に鮑を賜ひしを、己れもその尾をいたゞきて懷中せりといふ夢を語りて、身の不運をかこちける時、親能之を聞きて、其鮑の尾を即ち食ふとだに見たらば、猶めてたからまし、賜はりて懷中せしばかりなればにや、かく不運

なるならんといひしとぞ、

(平治物語 一一三)

◎去程にもりながは、まだそうてんの事なるに、頼朝に参る、君はいまだよるのところに御座ありけるに、あひのしやうじをほとほと、をとづれ、もりながが出仕申て候、頼朝きこしめされ、いつよりもあだちどのがけさの出仕のはやさよ、もりなが承つて、さん候、今夜それがし、ふしぎなる御むさうをかうぶりて候、たしかに夢物語申さむため、さて出仕申て候、頼朝聞召され、すけが吉事のゆめならば、はやくかたれたもたんと、の御諛なり、(中略)もりなが聞て、先ゆめのいとくをかたつてきかせ申さん、むかしちうてんぢくのあるじ、じやうばんだいわうのきさきの宮は、七月十四日に紫宸殿に御いて有、ひるの御ゆめに、こんじきのはだへの御僧御くちのうちにとびいらせ給ふと御夢を御覽じ、あくるせうへい元年に七多太子をまうけ給ふ、いまの釋迦は是也、我

朝のようめい天わうのきさきのみやは、あるよの御むさうに金のたま手ばこをひだりの御衣にうつすと、ゆめを御覽じて、しやうとくたいしをまうけ給ひ、なんばに四天王寺をたて、もりやを退治したまふも、みなこれゆめのいとくなり、又わがてうの、でんげうだいしは、れんげをいだと御ゆめを御らんじて、ひえいざんを建立し、めいしゆつをあらはし給ふなり、されば、ゆめとたかは、あはせがらにて候ぞや、能^すやうにあはせてたべや、大場殿とぞ申ける、(中略)先、一ばんの御むさうに東まやに松原むらさきの八重雲をかきわけつるくと出させ給ふ朝日を君の三五にいだきとらせ給ふと見参らせて候、そのつぎの御むさうに、きみはしるきじやうえに、たてゑほし、あさいくつをめされ、さがみの國やぐらがだけに御あがり有て、東西南北へ七足づゝあゆませ給ふと見参らせて候、其後やぐらがだけに、御こしをやすめさせ給ふ

が、ひがしへも、南へも、西へもむかせたまはず、北へむかせ給ひ、
 みをふくませ給ふと見まいらせて候、そのつぎの御むさうに君
 のゆんでの御あしを、きかいがしまのかたへ、ふみおろさせ給ひ
 扱又めての御足をそとのはまの方へふみおろさせ給ふところ
 に、君の御寵愛におぼしめす大塲の平太かげよし白きへいじに
 てうがたにくちつゝませさかなにくけつのはあはびをもつて御
 前に参る、君は御覽じて、あはびのふとき所を御手にもたせ給ひ
 て酒をたぶくゝと御ひかへ有て、いかに貴僧法師さかなひとつ
 とありしかば、きそう承つて御まへをづんと立てかもがいれく
 びしぎの羽がへしさつとさひていはひのわかをぞあげにける
 そのつぎの御むさうに君のさうの御たもとにさんぼんのひめ
 こまつをぞたてをかせ給ふと、たしかにもりながが見まいらせ
 て候ぞや、よきやうにあはせたまへや大塲どのとぞ申しける、

おほばきゝて、あらめてたの御夢や候(略)先一番の御むさうに、東
 山に松原むらさきの八重雲を、かきわけつるゝと出させ給ふ
 朝日を、君の三五にいただきとらせ給ふと御らん有て候は、うたが
 ひもなく、わがきみは日の本のせいしやうぐんとあふがれさせ
 給ふべき御ずいさうの御むさう也、其つぎの御むさうに、君は白
 き淨衣に立烏帽子あさいくつをめされ相摸の國やぐらがだけ
 に御あがり有て、東西南北へ七足づゝあゆませ給ふと御らん有
 て候は七なんそくめつしつぶくそくしやう是成べし、其後やぐ
 らがだけに御こしをやすめさせ給ふが、東へも南へも西へもむ
 かせ給はず、北へむかせ給ひ、をみをふくませ給ふと御らん有て
 候は、あふさるよみの候ぞや、きたかさぬると書ては、ほうてうと
 よみの候ぞや、爰をもつてあんずるに、北條の四郎を御たのみあ
 つて御代にたゝせ給ふべき御ずいさうの御夢候也、そのつぎの

御夢相に、きみの左の御あしをきかいが島の方へふみおろさせ給ふ處に、君のてうあいに思召大場の平太かげよししろきへいじにてうがたにくちつゝませ、さかなにくけつのあはびをもつて、御前に參ると御覽有て候は、あはびは海の物なれば、きかいかうらいけいたんこくかいじやうはるかひのとゞかん程、我君の御知行にまいらふずることめてたけれ、其次の御むさうに、君の左右の御たもとに三本の姫小松をそだて置せ給ふと御覽有て、候は、一本は我君、一本はあだちどの、今一本はかう申大場の平太かげよし也、そも松と申は一寸だにもひぬれば、千々にえださかへぢやう千年のよはひをたもつ由を承る、其松の如に若きみあまた御まうけ有て、末ははるゞとさかへさせ給ふべき御瑞相の御夢相なり、云々

(ハ) 夢・覺・む

(舞 曲)

○難波三郎夢見悪しき事ありとて、出陣の供せざるを、傍輩ども、何條夢見、物忌などいふ、さるをめたる事やあると笑ひければ、經房も實にもと思ひて走り下り、夢・覺・めて・參・り・たりといへば、中々興に入りけり、

平治物語 九二

〔四〕結論 鎌倉室町時代は、佛教が中心となれることは已に説述せし所なるが、今記録にあらはれたる所の夢の分類によるに、佛の示現に關するものは甚だ多く、特に經論其他錫杖など、佛に關するもの、靈驗あることを夢みるに至れるは、一變象なりといふべく、或ひは鬼神が夢を現するあり、天女のあらはるゝあり、而して軍記類にある夢の内容は、さすがは當時の社會の狀態、武士の思想をあらはし、戦ひの未然を告ぐるあり、武門興廢の前兆をあらはすあり、且夢見、物忌などはをめたる事にて、武士のいふべき所にあらずなど、如何にも武士たるもの、眞面目を發揮せる

古道を復興するを以て已か任とせり、

佛教は初め耶蘇教を禁せしを以て、國內の者之を奉ぜざるもの無かりしも、國學者、儒者の輩、何れも排佛の説を唱へしかば、其勢力亦昔時の如くならず、この時代に黃蘗宗新に起りしも、竟に盛なるに至らざりしなり、

洋學は西川如見、新井白石等によりて傳へられしも、初は蘭學に限り、之を學ぶものは多く醫者なりしが、後には英、佛等の學を學ぶものあるに至り、これらの爲に科學の新智識を輸入し、從來の思想界に幾分の變動を與ふるに至れるは、特に注目を要する所なり、而してこの時代は文運の最も隆盛なりし時にして、而もあらゆる階級より種々なる文學の出でしが故に、これらの中にあらはれたる夢の説明、例證等を、悉く涉獵して抄出せんは、容易の業に非ざるが故に、茲には近松の『世話時代淨瑠璃』、馬琴の『里

見八犬傳』、西鶴の『好色一代男』、『永代藏』等數種、其他諸家の隨筆、記錄等に散見せるものを収録して、當代の夢の内容、形式及び思想の一斑を示さんとす、

(二)分類

(甲)前代ニアラハレタルモノ

(一)夢ハ神佛ノ示現ナリトスルモノ

◎彼の神國に飛行きて、神に祈らば我學ぶ道も成就せんものと、稚心の氣疲れや、机引寄せ、腕を曲げ、とろりくと寢入ける、(ユレヨリ日本ニ渡り來ル路次ノ景ヲ述ベテ、伊勢神宮ニ着キシコトヲ記シ)妙なる御聲あらたにて善哉く正直心の大願に、神明納受の影映る、金銀二つの泉の壺、是は又素盞烏尊の蛇を斬て、唐國に武塔天神と名乗、厄神退治仕給ふ時、召されし冠、唐衣、共に授け與ふる尉は、住吉、姥は高砂、汝が國も東寧の文字は變つて鳥の跡、

かけども盡きぬ松の葉と、共に榮えん國の名に、頼みをかけよ經
錦舎と、御聲は軒の夕嵐、夢を残して覺にけり、

(國性爺後日合戦 一三七)

◎夫婦變らぬ夢の告、軍は二千里を出て西に利ありといふ事を、
まざく〜と見て候、ヤア和藤内此夢を考へ、君御出世の忠勤を勵
むべし、如何に〜とありければ、和藤内謹んで只今某、この濱に
て鳴の鳥と蛤稀代の業を見受しより、軍法の蘊奥を悟開いて候、
千里を出て西に利ありとは、大明國は我國より西に方つて千里
の波濤、軍法の法の字は三水に去と書く、三水は水なり、水を去と
は、此出汐の水に任せ、疾く日本の地を去るべしとの神の告げ、

(國性爺合戦 四七)

◎天滿天神を祈りし所に、阿武隈の松を見んと思はば、越前國氣
比の濱邊に行くべしと、あらたに靈夢を蒙れども云々、

(傾城反魂香 九四二)

◎夕、不思議や天神様の夢の告、狩野と云ふ繪師下るべし、阿武隈
の松を傳授せよ、父が出世の種ならんと見たは、まざく〜まさ夢
と云々、

(同 九四四)

◎いと美しき神女の、枕方に立せ給ひて、奴を嗅びて宣ふやう、翌
未申の比及に、箇様々々の旅客二名、備の親に疑はれて、脱得がた
き大厄あらん、他們は決して歹人ならず、俺與に過世ある、志氣潔
白の義士にして、そが義を結びて弟兄たるもの、他們と共に八名
あり、這們が厄難ある折毎に、俺影に立ち形に添うて、救はざる事
なかりしかども、思ふに翌の厄難は、疑似の一種あるをもて、そを
解かん事いとかたかり、備、先よくこの意を得て、面を犯し親を諫
めて、なほ聽かれずば、便直をもて、他們を放還りねかし、恚計らは
ば、憂を轉じて歡びと做す福ひあらん、然るを惑うて共に狐疑せ

ば、福還つて禍となる事瞬く間にして、親も良人も非命に死ん、努
 謹めよ忘るなよと、妙音高く示し給ふと思へば夢は覺侍り、

(八犬傳 八十五回)

◎昨宵夢裡に、身は又富山の岳巖に在り、姫神出現ましく、て水
 戯、水馬の一術を教給ふ事叮嚀にて、且宣ふやう、我始より這一術
 を汝に教へざりけるは、故意欠く處をもて、徴してみづから其箴
 になさしめんとして也けり、さりけれども、今戰國の時に當りて、水
 戯、水馬を學び得ずば、戰場に臨むといふとも、何をもてよく波を
 凌ぎ、水を涉して敵を征せん、或は君將の危ふきを拯ひまつり、或
 は身の亡ぶべきを保つに至るも、水を知らざれば善しがたかり、
 勉めよかしと諭し給ふと思へば、拂曉の鐘枕に響きて、忽焉と驚
 き覺にき、(中略)必ず是姫神の神謨なる靈夢にこそ候はめ、

(同 百六十六回)

◎亡母刀自の命日に、必死の人を兩個まで救はば、追薦、冥福の、よ
 すがにならんと見し夢に、奇しき教のありけるを云々、

(同 八十四回)

◎いつとなく寢入りけるに、跡よりゑびす殿、ゑほしのぬげるも
 かまはず、玉禪して袖まくり、片足あげて、岩の鼻から船に乗移ら
 せ給ひ、あらたなる御聲にて、やれくよい事を思ひ出してゐて
 から忘れたは、此福を何れの獵師成共、機嫌に任せ、語與ふと思ふ
 に、今の世の人心せはしく、我いふ事斗、いふて、ざらくと立行ば、
 何を云て聞す間もなし、おそく參りて汝が仕合と、耳たぶによら
 せられ小語給ふは、魚島時に限らず、生船の鯛を何國迄も無事に
 着やう有、弱りし鯛の腹に針の立處、尾さきより三寸程前を、とが
 りし竹にて突といなや、生て働く鯛の療治、新敷事ではなひかと
 語り給ふと夢覺て云々、

(日本永代藏 三)

◎貧乏神を祭れるに、此神うれしき餘に其夜枕元にゆるぎ出、我年月貧家をめぐる役にて身を隠し、様々かなしき宿の借錢の中に埋れ、悪さする子供を罵るに、貧乏神めとあて言をいはれながら、分限なる家に、不斷丁銀かける音、耳にひびき、癩の虫がおこれり、(中略)此春其方、心にかけて貧乏神を祭られ、折敷に居りて、物喰ふ事、前代是がたしめなり、此恩賞忘れがたし、此家につたはりし貧錢を二代長者の奢り人にゆづり、忽ちに繁昌さすべし、それ身過は色々あり、柳はみどり花は紅ると、二三度四五度繰返し、あらたなる御靈夢、

(日本永代藏 四)

(二)夢ハ吉凶ノ前兆ヲ現ハストスルモノ

◎まざくしい夢を見ました、妾や此方様に斬らるゝ、此方様は又腹切て、夫婦双の死人の爲と、流れ灌頂七流れ、殊勝らしい坊様が、鉦をはつて、念佛申すが耳に入り、ふつと目が覺め恍惚と、今のは夢であつたげな、

は夢であつたげな、

(薩摩歌 八七)

◎天狗の鼻に取付て、女護の島へ渡ると見た、其明る日、餘所から松茸と赤貝を貰ふた、

(薩摩歌 八八)

◎過し夜、不思議の夢を見る、譬へば黄なる雀、竹を唾へ、某が屋に巢をくひて、幾千代くくと囀りしに、又白き鳩、小松を唾へ、雀のかくる巢に運ぶと思へば、其儘夢覺めぬ、

(源氏十二段長生鳥臺 七二三)

◎さん候、大吉事にて候はん、先以て竹に雀、これ我々の家の紋、小松は源氏の物じるし、鳩は八幡の使者、いか様是は源氏方の、御音信を開き給はん瑞相、八幡宮の御神勅、まさ疑ふ所なし、さてさてめでたき御靈夢ぞや、

(源氏一二段長生鳥臺 七二三)

◎漢武帝の夢に、獨の老翁、我咽に釣針あり、苦しむ事堪難し、取てたべと歎きしかば、帝手自ら針を取り、苦しみを助け給ひしに、玉

一双を奉つり、我昆明池に住む者なり、君が寶祚を守らんと、其儘鯉の形となり去と、夢見し枕の上、夜光の玉の現然たり、

(双生隅田川 一〇〇七)

◎摩耶夫人、去年七月十五夜の夢の瑞、白象胎内に飛入ると御覺じて、御懷妊の月重なれば、大王の悦び、皇太后宮の宣旨下つて第一の後に立昇る、

(釋迦如來誕生會 八九五)

◎『朝鮮征伐記』に、豊公の慈母夢、日輸入懷中とあり、『扶桑略記』『搜神記』などにも之を載せたり、

(世事百談)

◎巢鴨の武家方の弟鈴木某、谷中感應寺(今ハ天王寺)にて、連月富興行ありしかば、其夢に合し富札を求む、その夢は三方に生首ありて、其首に何番と記しあり、依而其札を求めしに、果して當りたりといふ、

(宮川舍漫筆)

◎天保五年九月二日甲子の夜の夢に、「カケス」と云鳥數十百、屋外

の樹木の邊に群飛せり、木枝に糸のさがりたるが、末はわなに成てあり、一鳥これに首をさし入て、ふためくを、おのれ竹垣の押打を傳へのほりて、糸のまゝ捕得てめづらしき事におもひ、人にも見せなどして、さて、はなちやらんとする程に寤めぬ、廻これを合せて云、鳥を捕は物を取の義也、垣に登るは、分外の所に登る義なり、鳥のおのれとわなにかゝれるは、他より我に授るの義也、鳥名の「カケス」は不缺の義也、捕得て後、放んとするは生を殺ざるの仁也、然るに放得ずして夢寤たるは、收得領納の義なり、これをもて嘉兆の吉夢とす、又甲子福神を祭るの夜、神前に臥してかゝる靈夢あるは奇瑞にあらずや、
「おもほえず、福を得し鳥の名の、かけず、くづれぬ山の松かも、松の屋の心なるべし、

(松屋筆記)

◎信長公、安土にて、正月二日の夜、夢に、土の鼠來て、木の馬の腹を

喰破りしかば、其馬忽死けりと見玉ひしが、此年日向守の爲に他
界有し、信長は今年四十九にして、甲午の年、光秀は戊子に生れ今
茲五十五也、誠に悪夢と沙汰せり、

(牛馬問)

◎むかし、兼家卿のゆめに、逢坂の關を過玉ふに、關路ことごとく
白妙なりと見て夢さめぬ、雪は頓て消る、はかなきものなれば、凶
事たるべしとおもひ、ゆめ判者をして考させ玉ふに、是こそ吉事
なれ、斑の牛を得玉はんといふ、果して牛を送るもの有り、又其後
此ゆめを大江匡衡に問給ふに、逢坂は關也、雪は白也、春の除日に
は、必ず關白に成給ふべしと有り、果して明の春は關白に成給ふ、

(牛馬問)

(三)死者ノ靈ガ夢ヲ現ズトスルモノ

◎御邊身後に靈あり、(中略)などて妻にもその子にも、枕邊に立ち
夢に見せて、絆如此々々と告げざりける、と詰れば、一角頭を掉つ

て、角太郎は孝子也、果敢なき夢を實事として親を疑ふ事やはせ
ん、又窓井も如右ぞかし、目前なる良人を非として、いかでか夢を
侍むべき、

(八犬傳 六十回)

濡衣といふ地名に關する傳説の、夢より起れるものあり、左に
その全文を録すべし、

濡衣

◎聖武天皇の御時、佐野の近世といふ人、筑前の守にて下りしに、
京より具したる妻、國にて死けり、さて其國にある女を妻としけ
るに、先の妻の生るむすめを繼母にくみて、いかにもして此むす
めをうしなはんと思ひ、海人をかたらひて云、此曉來りていふべ
きやうは、京の姫君の、此ほど夜なく、我もとへましましたるが、
つり衣をぬすみておはしつるたべといへとて、色々の寶をとら
せける、海人曉來りて、かねてたのみしごとく、こはだかに云けれ

ば、父是を聞て大にいかり、行てみれば、むすめぬれたるきぬを引かつぎてねたり、是はむすめのね入たる時に、繼母のきせたるなりけり、父其たばかれる事を知らて、たちまち娘をころしける、さて次の年、むすめ父の夢に見えて、二首の歌を詠じける、父夢覺て、むすめの罪なき事をさとり、さては繼母のしはざなりとて、妻をおくりかへし、其身は出家して松浦山に住けり、世に松浦上人とぞいひける、それよりして、なき名おひたるをば、ぬれぎぬきると云傳へ、歌にもよみ侍る、其むすめの墓、むかしは聖福寺の西川のかたはらに在しを、近き世より、うつして、今は箱崎松原の西の橋際、博多の東、石堂口の川の邊なる小池のうちにあり、石をしるしとせり、父の夢に、むすめのみし歌二首、

ぬぎゝする、そのたばかりのぬれ衣は、ながきなき名のためしなりけり、

濡衣の袖よりつたふ涙こそ、なき名を流すためしなりけれ、

(江海風帆草)

◎慶覺行き暮れて、義輝公の住居なされし古御所の御門を立入り、御殿くを行廻り、小袖と名號し、緋緘の鎧に手をかくれば、俄に屋鳴り雲暗く、立木も草も動搖し、うんと一聲悶絶し、さしもの慶覺階を眞逆様にころくく(コレヨリ夢ニ入りテ、義輝公生存中ノ御殿ノ有様、義輝公ノ酒宴ノサマ、白菊、初雪ナドノ靈魂アラハレテ物語ルサマヲ寫シ)慶覺、破地獄の秘文を唱へ、袈裟押取て投付け給へば、佛力不可量、不可思議の御法の聲を聞く時は、悪鬼心を柔げ、佛土に到る嬉しやと、形は消えく消ゆると見えし、青、黄、赤、白四色の玉、虚空に飛去り失てけり、(中略)出立づる千疊敷、夜かと思へば日は未だ高し、梅花開けば菊の花盛り、秋かと思れば雪も降り、四季をりくの榮華の御所の上臈達も、空殿、樓閣皆

消えく〜と失せ果て、ありつる礎の枕の上に、睡の夢は覺めに
けり、
(室町千疊敷)

◎去る夜三夜、靈夢の告ありけり、譬へば甲冑したる一個の老武者、我枕元に立給ひて、我は嘉吉に戦歿したる春王、安王君の小傳犬塚匠作三戌是なり、當日我子番作一戌が、忠義の拵了にて、兩公達の御首級及我首を埋めて、恁々の地に在り、然れども美濃の金連寺は兩公達御終焉の梵刹なれば、那里へ返しまゐらせまく欲す、汝情地に主僕三箇の髑髏を穿拿りて、垂井の寺へ齎ゆかば、其日必ず我孫なる里見の家臣犬士の一人、犬塚信濃戌孝と喚做す者に逢ふ事あらん、其折這義を他に告げなば、戌孝宜しく計ふべし、努な疑ひそ、よくせよと示さるゝ事三夜に及ぶ、

(八犬傳 百八十回)

◎我も亦昨夜の夢に、其義を親の告給ひきと見し靈夢はありな

がら、泡沫夢幻の果敢なきを憑むべきにあらざれば云々

(全 上)

◎富室某氏父將歿、囑其子曰云々、後其子違焉、子夢、父曰云々乃嚙其頷、自是頂領腫痛、遂發疽、不癒而斃云々、
(東厓談叢)

◎『俳諧名流奇談夢之棧』には蘭更、半化房、越人、道彦、長頭丸、舍鳳堂等の靈が夢にあらはれて俳諧のことを語るあり、今その中にて、
(蘭更呵蒼虬)

◎東都淺草田原町に卜居せる月院社何丸、終日七步集の小鑑を
作意せしに、心神倦んで一眠せし夢中に、七步集の卷中より、古哲の靈憤然と聲を放つて云く、汝もと信州吉田の山賤にして、させ
る俳技もなく東都へ出て、森村次良兵衛が宅に食客たりし時、渠
が遊里耽に諷諫せし恩徳を以て渠を引込み、七步大鑑を世に公
にす、其功頗る莫大、年來この書に眼をさらせしに依つて、相應の

説もあれど、謬誤杜撰たらしくにして、其始卷中作者の意を失ふ、ことごとく正すに違あらず云々、心得よくといふかと思へば、夢は覺めたり、

〔奇談夢之棧〕

◎余夢見一偉人、厖眉白鬚、骨相不凡、自云六々山人、余乃以前疑質之、翁笑而不答、第曰、自効耳、余難之曰、今則吾語汝、昔者泰伯以民無稱爲至德、吾雖所不敢企而志則有在焉、彼其叛逆孤城、衆志不一、其不勞智力而下之、誰不知、而必恃此匹夫小勇乎、吾但欲負微罪以去之耳、蓋參河勳舊何限、率知求封侯極富貴、而無復一人爲國自竄以幾察兇賊者、汝不知乎、嬰城之衆、不獨豐公之遺臣、而兇奸不逞之徒爲多、雖在統一之後、而保無餘孽、殘黨、驅扇唱亂者乎、吾之所爲自竄竊欲陰察之以効涓埃、而其有無亦不可度也、不幸或有變、則吾將先赴告爲之防禦、幸而無事、則高尙其蹤、以超於埃壘之外、其官西州居洛東、皆爲此、而凡欲爲人之所不爲、以自効、吾不效、夫徒勸榮達以爲

子孫計、而况人之知不知、惡足問焉哉、言畢而夢則覺矣、(愛日樓集)

〔四〕靈魂、肉體ヲ離レテ夢ニ入ルトスルモノ

◎松風、村雨、姊妹嫉妬の恨みの魂の、打寄せ争ふさま(形ハ臥シテ寢タルマヽ)を寫し、龍宮に分け入り、日の御座の御劍を取ること、を述べ、龍宮の状をあらはすこと詳密を極め、さて、須摩の高波劇しき夜半の夢に、取たる劍の刃、渡るも深き戀の道、傳はる國の御寶の、お供申て歸る波の、須摩の浦かけて、吹や後の山嵐、關路の鶏も聲々に、夢もあとなく夜も明て、村雨と聞しも今朝見れば、松風ばかりや残るらん、とて姊妹の夢を寫したり、内容余りに長ければ省略しつ、夫を思ふ夢中の一念、龍宮に入て御劍を取り云々、よくその内容をあらはせり、

(松風村雨東帶鑑 七三〇)

◎恰ど和女の恰好な美しい娘が、我等が懐へぐすくと這入るゝ、是何者じや、男の寐肌へ、狼藉千万と咎められ、妾は此山の獵師

の妹じや、和郎の肌へ美事を馳を、一疋つけ込だと、無理に入らふとめさるゝ、否人れまい、否入れうと大汗になつて夢覺め云々、

(持統天皇歌軍法 八八〇)

◎何々と語り寢入に、聞人もともに同じ軒をあらそう、かゝる時、勘右衛門現の形を現はし、此度二人が愁歎の中に兄弟分のかたらひ、うれしき事にぞ有ける、三之丞、面影十九万石の下に似たるものもなし、されども郡山風にて鬢つき下り過ぎて見苦し、左内何と思ふぞ、少し後を立てんと鏡に向はせ、此くらゐがよいかといひ捨て、其まゝ夢は覺めける、あたりに手盥もなく、剃刀もなく、月代は誠に剃りて残せり、夢は夢ながら誠に不思議ぞかし、

(男色大鑑 三)

(五) 靈魂、肉體ヲ離レテ遊行ストナスモノ

◎青地駿河守、夢に朝鮮に至りしに、其時の圖をかきて屏風とせ

しが、後に朝鮮征伐の事あり、其圖を携へて行きしに、少しも實地に違はざりしといふ、

(白石紳書)

◎豊太閤朝鮮を伐たれし時、七歳の兒を虜にして連れ歸りしに、其兒七言絶句の詩を作りければ、それに感じて其兒をかへさると云ひ傳ふ、あはれなるとゆゑ、其詩を左に記す、
(在大唐と云ふ句にこれなく明の兒とみえたり)

夢裡分明歸故郷、
雙親向我問扶桑、
華鯨樓上一聲曉、
欵枕猶疑在大唐、

(昆陽漫錄)

◎夢想兵衛は、浦島より授かりたる釣竿を骨として紙鳶を造り、之に乗りて少年國、色慾國、強飲國、貪婪國、貪言郷、煩惱郷、哀傷郷、歡樂郷をめぐり、歡樂郷の國王に謁し、教へ諭されて慙愧し、再び紙鳶に乗りて歸らんとすれば、その紙鳶を小兒に破られ、進退こゝに究りて、握り固めし左の拳と共に怒りを揮起し、走りかゝつて、

前に立たる童子の頭を打たんとせしが、打はづしたるはづみにつれ、身を跌して水闌へ逆さまにおち入りて、頭を枳に打碎かれ、一聲苦と叶びもあへず、圍堰の中に死すると見しは、これ南柯の一夢にて、愕然としておどろき覺たり、

(夢想兵衛胡蝶物語)

◎天保三年十月十一日の夜の夢に、夜分の事なれどいとくからず、吾住所も田舎の岡上などの家にて、谷をへだて、向の山に叢社の杜あり、杜の小木左右になびきて、正中の神木松杉の類にやありけん、遠目なればさだかならねど、いと高く葉もしげりたる大樹の、直に立たるを見たり、これ大樹を拜し奉る心ちして、いとたふとくなん、おぼえたりし、

(松屋筆記七十一記夢)

◎三月十日夜夢、登麴町候火櫓春望、得候火櫓頭萬里春一句、

(隨意錄)

其他烹雜記には、夢に冥土に到れるあり、宮川舎漫筆には、道を

行くに金子の遺れたるを見て、拾はんとして尿をしたりしに、金子のことは無にして、放尿ばかりは實なりしことを記せるあり、

(六)動物ノ靈ガ夢ヲ現ストスルモノ

◎昨夜の夢に、何處とはなく、いと大きな犬の、その色黒、白、雜毛なるが、その數すべて七頭あり、そが中に隠れていまだ見えぬもあり、或は間遠くして、致しがたきも多かりしも、某深く心に愛して、掌鳴らして呼ぶ程に、一隻の巨犬走り來つ、某之を搔抱くに、わが身も亦忽地に、犬になりぬと思ひつゝ、愕然として覺めたりき、

(八犬傳 六十回)

◎翌十二日の夜の夢に、晝の未申などの頃とおぼしきに、一つの池ありて、池中に龍の或はあらはれ、或は潜て遊さまを見たり、龍は貴瑞の物なるを、まぢかく見しは、たぐひなき奇瑞ならずや、

◎舟を敷寝の小夜更けて、飾置かせし蓬萊山の北の洲崎の海老の鬚に、唐織の金帯一筋懸つて、春の初風に翻ると見しは、心地の好き事大方ならず、千鶴万龜の祝ひの水汲むと思へば、遙の沖より、目馴れぬ翅の飛來つて、これは女護國に住む美面鳥なり、御身の父、世之介、稀に彼地に渡り給ひ、女王と玉殿の御語らひ淺からず、再び歸り給はぬなり、されば親子の契深く、色道の秘傳譲りたまふと、一つの巻物、左の袂に投入るゝと思へば、初夢覺めて云々、

〔好色二代男 一〕

◎慶長七年、洛中に猫のつなを解きて放つべき沙汰ありし時、よきたつとき發心者の夢に、鼠の和尚とおぼしきが、進み出で、しやう、御僧様へ向ひ言葉をかはすこと憚りに存じ候へども、御教趣のほど、れんく院のしたにて、日夜御だんぎを聽聞仕り候

に、懺悔に罪を滅すと仰せられ候について、罷り出で、候なり、さんぎさんげをも仕り候はゞ、一句の御道理をも御授あつて下され候へかしと申しければ、僧答へて曰く、汝等が、ふざいとして、かかるやさしきことを申すものかなと、斜ならず思ひ、草木、國土悉皆成佛となれば、非生草木も成佛すと見えたり、況んや生ある物として、一念彌陀佛則滅無量罪、ゆいしんのみだ、こしんのじやうどなり、爰を去る事遠からずと説き給へば、たとひ鳥類、畜類たりといふとも、一念の理道によつて成佛せずといふ事やあるとの給へば、さらば懺悔の物語を申し候はんとて、鼠なきのなんだを、おし拭ひ申すやうは、今度洛中の猫のつなをはなされ申すゆゑ、我々一もん悉く影をかくし、或はにげ、或はほろび、今少し残り申すものども、けふあすの命と思ひ、心ほそく、いしずゑのかげ、椽の下にかゝむといへども、寸の油斷も候はず、又穴の住居を仕り

てみると雖も、一日二日のことにもあらず、中にはかりも、いきども、もりてゐられ申さず、たま〜うき世間へ罷り出でんとすれども、恙や取りておさへ、あたまより噛みひしがれ、恙々むらを引きさかれ、かゝるいぶせき事にあひまつる事、前世の因果かなしうこそ候へと申せば、僧答へて曰く、汝らが恙ほたれていふ所、いはしく思ふなり、まづ〜くせごと、人ににくまるゝ事を語つて聞かすべし、わらはごときのひとり法師、たま〜傘をはりたて、置けば、やがて恙まもとを喰ひ破り、又だんなをもてなさんとして、いり豆、ぎぜん豆をたしなみおけば、一夜の中にみなになし、袈裟、衣ともいはず、あふぎ、物の本、はりつけ屏風、かき餅をもたまらせず、いかなる柔和にんにくのあじやりなりとも、命をたちたき事勿論なり、況んや、大そくの身にては、道理恙ごくせり、その時鼠こたへていはく、我らも御たとへの如く存じて、わかき鼠ども

に、いけんをなすと雖も、忠言耳にさかひ、良薬口ににがしと申せば、中々聞きも入れず、なほ〜悪逆つかまつらんと申す、その中にもまづ第一、人にくまるゝ事勿れ、おひがしどの、おきたどの、あらひぼろしやう、つきおひ、ちやこ、おはしたのまへだれ、かたひら、たび、また、袴、肩衣のはし、からうとのすみ、つゝみつゝらの中へとりこもりて、家を作り、餌食にもならず、てがらにもならざる物をくふこと勿れ、つぼのはたなどまはるなど、あかはだか、つけ紐の時よりも申しきかせ候へども、かぶきたるなりばかりを好み、人の枕もと、こも天井、ふる屋根などをすみかとして、悪逆ばかりを仕り候事、せひなき體とかたり申す、

又つぎの夜の夢に、とらげの猫來り、實にく〜しく語り申すやう、御僧様たつときにより、鼠根性として人のにくむやつにて候、かゝるやつばらまゐりて、いろ〜の事を申すよし、やがて告げ知ら

するかたあり、總じてかの鼠と申すは、下道のうはもりなるべし、御僧の御慈悲をたれ給ひて、やがて物をひかん事必定なり、又我らの系圖をあらく談り申すべし、(中畧)われは是天竺、たう土におそれをなす、虎の子孫なり、日本は小國なり、國に相應して之を渡さるゝその仔細によつて、日本に虎これなし、延喜の帝の御代より、御寵愛あつて、かしはぎのもと、した籠のうちにおき給ふ、綱のつきたるゆゑに、一寸さきを鼠徘徊すと雖も、心ばかりにて取付くことならず、湯水のたべたき時も、のどをならし聲を出して、たべたけれども、あたまをはり、いためらるれば、せひもなし、言葉を通ずと雖も、天竺の本語なれば、大和人の聞き知ること無し、たいりやくつなぎ殺さるゝばかりなり、にふがくの御慈悲、くわうたいにて、しづが伏屋に月のやどり給ふが如く、猫ふせいまで、に御心をつけさせ給ひ、綱をとき、苦をゆるさるゝこと、ありがたき

御事なり、此君の御代五百八十年の御齡を保ち給へと、朝日に向つて餘念なう、のんどをならし拜み申すなり、僧答へて曰く、猫のいはれやう、近頃しんべうなり、なんせんさんみやうの心を思へば、きるともいかでかへん、さりながら茲にわび度事あり、出家の役にて、かやうの事を見てはおかぬ法なり、あつかひに及りたきとのことわりなり、殺生ばかりをするものは、因果、車輪の如く、死にては生じ生じては死ぬ、るてんにさんりんしては、其因果のがれ難し、一さいの虚空を知らんによつて、しやうじもろくの諸悪をはなれ、三がい六しゆりん系消滅して、則ち解脱を得ると見えたり、殺生をやめられ候へ、其方の食物には、くごにかつうををまぜて與へ、又折々は、たつくり、にしん、からざけなどを、朝夕のゑじきには、如何と問ひ給へば、御ぢやうの如くにては候へども、先々あんじても御らんぜられ候へ、人間はよねを以てこそ五臟、

六腑をとゝのへ、あし^足て、達者にりこうをも、のたまへ、山海の珍物は、はんをすゝめんがためなりと承りへば、われくもその如く、天道より食物にあたへ下され候故に、鼠をたべ候へば、無病にして飛びありくこと、鳥にも劣るまじと存じ候なり、又ゆるくと晝寝を仕るも、鼠をたべんと存ずる爲なり、然るを今より堪忍のこと、同心申しがたし、御分別候へと申せば、さしも廣大無量の御僧なれども、返答しかね、感涙きもをけすばかりなり、

(猫の草紙)

(七)思フコトヲ夢ニ見ルトスルモノ

◎思ひ込んだる一念の、根氣疲れて現なく、とろりくと寝入ける、夢中の魂假初の、狩装束や五月闇心の闇も晴れ渡る、松明振立て兄弟は、見上ぐる床の掛繪の富士、屏風、襖の薄原、砂子の露を押分けて、宵の葛籠は祐經が、寝たる姿と夢心地、兄弟枕に立かゝり、

三千年の園の桃、盲龜の浮木に逢ふ心地、年來心に埋木の、優曇華の花咲けりと、松明投棄て太刀を抜き、敵の胸に差當て、莞爾と笑ふて立たりし、心の内こそ嬉しけれ、いや待て時宗、斯まで心を盡せし敵寝さして討は残念なりと、大音上て、如何に祐經、赤澤山に討れたる、河津三郎が二人の子、曾我の十郎祐成、同じく五郎時宗、大事の敵を持たながら、寛々と臥すは油斷なり、起合やつと呼ばれば、心得たりと起上るを、祐成は一の太刀、弓手の肩より肋下りに切り付る、二の太刀は時宗、馬手の肩より乳の下まで、かけずたまらず斬落し、積る恨みを思ひ知れ、岩も拳も通れくと斬伏せて曾我兄弟の者共こそ、日本無双の祐經を討取たりと呼ばれば、すはや夜討と松明の光に消えし狩場の様、夢は其儘覺てけり、

(曾我五人兄弟 五五二)

◎納所の僧義山、ぬるともしらずまどろみし夢に、賊四人おし入

り、各手に白刃を提げて、義山をおし伏せ、刃をつきつけ、住持の居間に案内せよと責めらるゝと見て驚きさめぬ、
(兎園小説)

この夢は、當時處々に賊の入るよし、人々心を付くる折なりしを以て、思ふことが夢にあらはれしなり、

(八)植物ノ精靈ガ夢ヲ現ストスルモノ

尾張大根精笑西月

◎西月、元、尾陽の産、今兵庫に卜居して關西の一人と稱す、彌生の空、須磨のさくらを一見して、もどりかけ、とある茶店にこしをかけ、貳合半をかたおけ、とろくくと居眠りし夢に、蘿蔔(蘿蔔ナラン)一ぼんころくとところび出て、忽、憤聲を激發し、西月々々と呼びけるに、西月は肴有事なり、手に取らんとする時、人面をあらはし、西公我はこれ日本にかくれなき尾張大根なり、足下爰に十とせ以前、須磨へ引こもり、明寺をかり、卜念人を門人とし、専ら名古屋

屋風をもつて世をさはがす、書は行成流とかとなへ、鼻を定規とさだめ、悪筆前後を不定云々、これは不佞が自の徳を自負するにあらず、足下へさとし申すなりと見て、夢は酒客の一聲に覺たり、
(奇談夢之棧)

(九)夢ハ方術ニヨリテ見ルコトヲ得トスルモノ

◎夜の衣を返しては、夢待顔の假枕、
(持統天皇歌軍法 八八二)

◎戀しき人をゆめに見んとおもへば、雙陸盤を枕にして、衣をかへして、夢の妙童菩薩を念ずれば、必夢に見るとなり、ある歌に、いとせめて、戀しき時はぬば玉の、よるの衣をかへしてぞぬる、
(消閑雜記)

(一〇)夢ハ事實ノ真相及ビ未然ヲアラハストスルモノ

◎昨宵見し夢に、犬塚信乃は大八の親兵衛を打抱き、犬山、犬川、犬田共侶、わがこの旅宿に索ね來て、最大恨みしを、いひ解かんとし

つる時、枕に響く鐘の音に、驚覺て僕ふれば夜は尙丑の時なりき、

(八犬傳 五十九回)

◎時に文覺假寢のたましひ、忽、體を顯れ出て、今目前にありくと、亡ぶる平家の有さまを、夢ともかがず(コレヨリ頼朝兵ヲ擧ゲ、義經、奥州ヨリ出デ、義仲北陸ヨリ起リ、平家西海ニ逃下ルサマ、義朝ノ髑髏ヲ文覺ガ引出物ニ出スサマ、義經兵ヲ率キテ西海ニ平家ヲ滅ボスサマヲ記シ)どうと落たる水の泡、消るとひとしく海の面、忽もとのうつの山、磯打波と聞えしは、草の葉渡る風の音、義朝の頭枕の上、ねぶりの夢は覺にけり、

(同 六〇六)

◎寛政年間、長崎某といふ旗本、高千八百石の所領、駿河眞鈴郡(益津郡)百姓某、われ數年富士の裾野に埋居れり、汝行きて堀るべしと夢みしこと再度、よりて之を堀りしに、富士に似たる石を得たり、この石、晴雨を知る七の瑞あり、

(宮川舍漫筆)

◎尾張士、山名又六者、每語家人曰、余少時夢登富士山、見一堂扁額書九十三、予必當壽九十三矣、今茲文政三年夏、果九十三而死、

(隨意錄)

◎いやはや、夢は可笑いもの、これ赤沼殿御氣にばしかけられな、貴殿逆心の企にて、尊氏公より御相傳の印判を賺取り、御侍女の中川を瞞し御太刀を奪はせ、罪を某に覆せて、此左衛門に切腹させんず謀と、まざくと見たる夢、覺むるとひとしく枕元に、此太刀のあつたるは、何んと正夢とは思さぬか、

(雪女五枚羽子板 九五九)

◎いぬる夜夢に、奇しき告あり、親の聲歟とおぼしくて、やをれ成之介、未だ知らずや、今番、里見殿に大敵あり、鎌倉の兩管領、合縱連衡の大軍をもて、水陸より攻代んとす、我義兄弟滿呂復五郎は、犬川犬田兩將の手に隸られて、必ず行徳の陣に在らん、汝那里に赴

きて、復五郎をたのみて役に従へ、尙幸にして軍功あらば、里見殿に仕へまつりて、我志念を紹ぐに足らん、勉めよかし、といふ歟と思へば、愕然として驚き覺めたり、

(八犬傳 百六十一回)

○我親兵衛を憶ふ故歟、昨宵殊なる夢を見たり、譬へば犬江親兵衛も、今番の獸獵の隊に在り、他皇國には獲がたかるべき暴虎を射て斃せしを引提て、我に見すると思へば、忽焉と驚き覺けり、

(同 百五十一回)

(乙)新ニ當代ニアラハレタルモノ

(一)仙人ノ夢ヲ現ストスルモノ

○はや曉がたになりし比、ゆくともしらず、身は只ひとり、富山の奥の溪澗の、こなたの岸に立在給ふ、その時齡は八十あまり、百とせ近き一個の老翁おん背後より参りつゝ、義實に申すやう、この山ふかく入らせ給はゞ、おん郷導仕らん、さはれこの川は、わたし

がたし、右手のかたに、樵夫がかよふ一條の細道あり、去歲よりして、この山掙カキキを禁斷せられしかば、荆棘いやがうへに繁茂りて、何處を路徑ともわかねば、僕既に枝を折かけ、或は草を執ねなどして、栞として候へば、其處よりおん供仕らずとも、迷はせ給ふべうもあらず、究て本意を遂給はん、彼方より進ませ給へと、指し誨へまゐらす、義實、不思議の事におもひ、その名を問はんとし給ふに、忽地に覺てけり、是華胥國の一夢なり、

(八犬傳 十一回)

○昔堅地で四十年、生ものじりから世を捨て、一生涯を夢と暮す夢想兵衛といふものありけり、(中略)けふも本牧の沖に船をうかめ、獨り暴風をまつほどに、弗と氣くたびれがして、楫を枕に思はずも、とろくと目睡むをりから、白髪たる老翁、腰篋を著け、釣竿を肩にし、太公望には、鬚がなく、夷三郎にはちと耄たるが、忽然として舳前に立存、これ起玉へくと、醫者どの、若黨が、藥取を起

すやうに搖起せば、夢想兵衛びつくりして、鐵壺眼をはつきり開き、岸をはなれたこの船へ、そなたは何處から乗らしやつた、船幽靈なら柄抄がない、(中略)浦島仙人とは、わが事なり(コレヨリ浦島子ノ傳説ヲ説ク所アルモ省ク)此の世の人が見ることは見るけれど、その氣のつかぬ所を見るを、眞の活眼といふぞかし、さればとて、之を見んこと容易ならず、その境に至らんと尤難し、鶴に乗せては古めかしいから、此釣竿を與ふべし、之を骨として紙老鷗を造り、この糸を著て糸のすゑを樹に繋ぎ、その紙鳶に乗る時は風自ら紙鳶を飛して、空中に冲らんこと、列子にも劣るべからず、(中畧)努々疑ふこと勿れといふかと思へば形は滅して釣竿のみぞ遣りける、

(夢想兵衛胡蝶物語)

〔三〕説明 この時代には、夢の現象將た原因等について、或ひは之を心理的に解釋し、若くは生理的に説明し、又通俗的に論ぜしも

のあり、且夢そのものを説明せしに非ざるも、之によりて夢に對する思想の如何を知るの料とするに足るものあり、今これらをすべて説明の項目の下に一括して、その大概を示さん、

(甲)通俗的説明

◎夢は五臓の煩ひにて、佛經にも世の果敢なきに譬へて、泡沫夢幻といへり、 (八犬傳)

◎を、氣がくたびれては、いろくの仔細もない夢見るもの、身に金が入るとて斬らるゝが上夢、 (薩摩歌 八八)

◎戀しき時の夢、床しきの現、逢ひたき時の幻、心は心に移る鏡の如し、 (好色二代男 七)

◎夢は見るにあらず、覺ゆると覺えざるとに有り、釋迦は之を傳送識と申さるゝは亦理あるかな、 (菘菘漫筆)

◎或人の夢といひ思ふといふ、何をかわかち侍るべきと言ひし

に、鳴鳳卿の答へしは、晝は思ふ夜は夢と、おもしろき對話なるべし。

(理齋隨筆)

◎亡父成章曰く、いねて見るは夢なり、さめて見るはうつゝなり、今の夢にもあらず、さめてもあらぬをうつゝといふは、夢かうつゝかなどの詞を、大方に心えたるなるべしといへり、(北邊隨筆)
◎夫、夢は五臓の疲れといへども、貧者の正夢にて、北條の姉妹夢の賣買にて、天地懸隔成ル仕合セ、或は義貞の亢龍の夢、皆人の知る所なり、

(夢中老子)

◎懊惱たる物おもひ、凝てゆふべの夢となり、夢亦覺てゆく所をしらず、夫、夢は形貌の影なり、亦心神の勞なり、人、目を閉て日に背けば、その影まへにあり、しかれども、その影を見ざるものは、未だ心の至らざるなり、昔莊子夢に胡蝶となれば、翻々然として胡蝶也、自ら意を得て莊子たるをしらず、俄然として覺むる時は、遽々

然として莊子也、莊子が夢に胡蝶となる歟、胡蝶の夢に莊子となる歟、覺て後なほ疑へり、物の變化疆なし、浮世は恰も大夢に似たり、(中略)瞽盲の夢に形を見ず、聾者の夢に聲を聞かず云々、

(夢想兵衛胡蝶物語自叙)

◎行、素夢常清、留青廣集に見ゆ、げに、行ひのやうによりて夢をなすべければ、夢も亦吾心にとへば、恥かしきものなり、(閑田次筆)
◎晋衛玠、問、樂候、夢、某云、是想、衛曰、形神所不接而夢、豈是想邪、某曰、因也、未嘗夢、乘車入鼠穴、無想、無因、故也云々、

(隨意錄)

◎聖人に夢なしといふことは、道家の言也、是虚無の間に寂然として、天地を友とし、山川を愛し、外物にふれざる時は、心靜にして、自ら夢なきを知るべし、

(二)天地或問珍

◎或人又問て曰く、大凡夢は如何なるものにや、曰く、心氣の動くなり、又風寒暑濕等に因て見る事多し、(中略)又夢に鬼と交るの類

は、皆病なり。(中略)正夢、瑞夢といふ事は、一生のうち一度有や無やの事なるべし、百人が百人皆雜夢といふものにて、更に心に入べからず、

(牛馬問)

(乙)生理的説明

◎陽氣勝るものは夢を見ず、陰氣勝つものは夢を見る、故に遠く旅行して疲れたる時は、陽を失ひし時なれば夢見るなり、

(橘菴漫筆)

◎正理論曰、頭爲天谷、以藏神、註神存則生、神去則死、日則接於物、夜則接於夢、神不能安其居也、

(解體新書附錄)

◎夢は五臓のわづらひといふことは、今按ずるに、素問に「肺氣虚、則使人夢見白物」(中略)此皆五臓氣虚、陽氣有餘、陰氣不足云々」とこれによりたる諺なるべし、

(梅園日記)

(丙)心理的説明

◎昔一人の民其母の死なんとする時、死して地獄、極樂ありやなしや、夢に來りて告げ給へといひしが、母諾して、死後一兩日の後、夢中に來りて地獄、極樂あり恐るべしといへりといふ、如何なる事にや、

對へて曰く、これも思ふ事を夢に見たる也、人一たび魂散じて何んぞ二度來るべき、定めて夢に來りて告ぐべしと待つ心よりかゝる夢を見しものならん、

(天地或問珍)

◎夢は如何なるものぞや、晝思ふ事を見、或ひは思ひよらざる事を見る事あり、惣べて夢に依つて善惡の機あらはる、委しく其謂れを聞かん、

對へて曰く、夢はすべて臟腑の虚弱と知るべし、凡人の夢は氣より夢見るあり、又臟より夢見るあり、氣より見ることは、眠らざる時は形開いて志、外に接はり出づるなり、眠る時は形閉ぢて其氣

内に専ら也、(中略)見る事聞く事にふれて夢を見る、其證據には、見ざる國知らざる所を夢に見ることなし、古語に南人不夢駝、北人不夢象といふことあり、これもその理なり、(中略)又臟より夢見るといふは、たとへば腎の實したる人は水を見、虚したるものは火を見、虚したる人寝ねて遺精するは、保つこと保はざるによる也、又一説に陰氣の人は火(陽)を夢見るといふことあり、是皆一體の盈虚消息は天地に通ずる故也、すべて夢は我心より生じ、我病より生ず、外より來るにあらず、又夢によつて吉凶の差別はあるべからず、

(天地或問珍)

◎胸に手などを當て、眠る時は、必ず恐ろしき夢を見るは如何なる事にや、

對へて曰く、胸に手を當て、寝る時は氣血通ぜず、故に物に押へられたる如き心生ずる故なり、たとへば帶をしきて寝る時は蛇

を夢見るが如し、是氣の自ら交るによつて如此事あり、(列子)曰く、籍帶寝スル時ハ則チ蛇ヲ夢ム云々、すべて種々の事を夢に見るは、意外に感じて魂やすからず、思ひやりての事なり、夢を信じて心を惑はすは愚の至りなり、何ぞ夢に吉凶あらん、(同書)

◎凡人、常ニ思想ノ心ニ斷ヘザルハ、皆舊事ヲ習熟スルニ因リテ或ヒハ縁ニ觸レテ出デ、又ハ縁無クシテ獨リ反復スル者也、夢境ニ至リテモ亦然リ、畢竟習熟ノ夢裏ニ反復スル者ナリ、然ルニ醒中ハ實境ニ對スルガ故ニ、思想ノ虚ナルヲ覺シ、夢中ハ實境ヲ忘スルガ故ニ、夢境ヲ以ツテ實トス、其或ヒハ錯亂顛倒スル者ハ習慣ノ念重疊シテ兢ヒ起ルナリ、サレバ聖人ニ夢ナシトイフハ決シテ無キコトナリ、(中略)唯聖人思想分別ニ著スルコトナシ、(中略)又朕兆ノ夢ニ入ルコトアルハ、其身ノ運數ノ盈虚消息ニヨツテ、自ラ此思想ヲナスノミ、云々

(理學秘訣)

◎夢は形氣の上であり、形氣をはなれて夢ある事なし、夢は吾思ふ所の妄想、睡中に發動するを、覺て後、實に見聞したるやうに思ふなり、聖人に夢なしとは、妄想なき故なり、(中略)我嘗て盲者に問ふ、夢見る事ありや、盲者曰、夢にもたゞ人の言語、音聲のみを聞くと思つて、形色を見ることなしといふ、これすでに盲者たる故に、形色の思慮なきゆへなり、又聾者夢見るやと問へば、夢もたゞ人の形色、模様のみを見て、音聲をきく事なしといふ、これすでに聾者たる故に、音聲の思慮なきなり、目死ぬれば形色の夢なく、耳死ぬれば音聲の夢なし、鼻死ぬれば香臭の夢なく、口死ぬれば飲食、言語の夢なし、一身死ぬれば百夢千夢みななしと思ふべし、

(醍醐隨筆)

◎人の夢は神と物と交るにあらず、乃ち魂と物と接するなり、目を聞けば陽となりて魂その位に居る、目を閉づれば陰となりて

魂その位を離る、則ち時ありてか物と接はる、かゝる故に、寢ては夢生ず、神は則ち中に居て將帥の如く一身の主たり、離れて之を外にする時は死す、故に方術家に神を出すときは、その生も死するが如し、然れども若夫化して二となり三五となりて、これ彼皆よく動靜するものある時は、則ち又純、皆神なるにあらずや、或ひは魂と魄と兼ねたり、まゝ、形を煉り生を養ふこと、初めて成ることありて、返ること能はざれば、則ち死す、出で、滯ることある時は病又驗むべし、故にいふ夢は乃ち魂と物と接するなり、(宋ノ王達ノ説ニヨル)云々、

(烹雜の記)

〔四〕雜例 夢の吉凶、方術、分類等種々の説をこゝに概括して、雜例として示すべし、

(イ)夢の吉凶 遮莫、周禮に六夢の説あり、則ち其官を置きて占夢を以て其吉凶を知る事も最故たり、然らば、上古は天朝にもこの

事あり(中略)この他夢によりて吉凶ありし事枚舉に違あらず

(八犬傳)

夢などにも、俗間に一富士、二鷹、三茄子とて、吉夢にも段々の次第あるをいふ(中略)古人の詩に可憐一覺登天夢、不夢商巖夢擢郎といふあり、常並々の人は、魔神の夢枕に立ちて欺瞞すること多かるべし、必ず靈夢なりといひて、乾没の企て事、又は乗るか反るかなどの事はすべき事にはあらず、

(訓蒙淺語)

(口)夢・茄・子、一富士、二鷹、三茄子とて、これらを夢に見るを吉徴とす、その子細をしらず『笈埃隨筆』に或人いふ、この三事、夢の判にあらず、皆駿州の名産の次第をいふ事なり、云々、しかるに唐土にては茄子を夢に見る事を忌なり、宋の樓鑰が『攻媿集』^{七十}に、劉允叔夢茄子、而作舍菴、題其後云、退之送窮而延上坐、子厚乞巧而甘抱拙、若允叔之舍菴、則眞驅之、雖未能絕紫瓜之生、畏君之詞、自爾當不復

敢入吾夢矣、然此種、一名不落、彼夢滿甌三顆、不妨甲科釋褐者、殆以此、又似不必力驅之也、(舍菴ハ周禮占夢ニ、舍菴)『西湖遊覽志』(中略)祈夢、夢人以二樑貯六茄、爲餽惡之、蓋杭人以茄爲落蘇、而應試者以落蘇爲下第也、

(梅園日記)

(ハ)一富士、二鷹、三茄子、世によき夢とて、一ふじ、二たか、三茄子といふは、何の故とも辨へがたし、駿河などの諺とは見えたり、其國の名物をいふにや、(中略)又思ふに、富士山は高大をよるこび、鷹は鷲鳥にてうちつかみ取るといふ義、茄子はなす、なるといふを、成の意に祝したるか、又古き諺に、夢と鷹とはあはせがらといふ事ありといへり、

(嬉遊笑覽ニヨル)

(ニ)初夢、『嬉遊笑覽』に『古事談』『山家集』『守武千句』『佐夜中山集』『日次紀事』『一代男草子』等を引きて、いつにても節分の夜のを初夢とするなり、今江戸にて元日をおきて二日の夜とするは其

故を知らずといへり、初夢の吉凶は、一年の吉凶の前兆なりとして、吉き夢を見んことをねがひしは『古事談』に藥房龜王兵衛の夢を、康頼が判して、年始にふくたのしき事なりといひしが如き、又後に示す寶船の條にあるものによりて知るべきなり、

(ホ)寶船 『日次紀事』に舊年晦日之夜、禁裏貼畫船於白紙而賜宮方及諸臣、地下良賤亦以畫船布臥榻之被底寢、今晦日夜有吉夢、則來歲得福云、若見惡夢、則翌朝付是於流水、是謂流惡夢、斯船内、畫種々珍寶、故稱寶船とあるによりて、その意を解するを得べく、『安齋隨筆』によれば、古代の書には、正月の枕の下に敷くこと所見なし、京都將軍の頃已に此事ありといへり、

(ヘ)廻文 寶船に添えて、なかきよのとをのねふりのみなめざめ、なみのりふねのをとのよきかなといふ廻文の歌を書きそえて、敷寝に悪しき夢を川へ流す咒事なりといふ、

(ト)獏 動物、支那の想像の獸、形態に似て、鼻は象の如く、目は犀の如く、尾は牛の如く、足は虎の如く、毛は黑白の班にして、頭小さく、之を畫けば邪氣を避け、又人の夢を食ふといふ、故に邦俗にも人の惡夢を見たる時は、獏食へ……と唱へて、之を穢ふことありといふ、又獏の字を寶船の帆に書きたるを、枕下にしくことありしが如く、『二代男草子』に、夢ちがひ獏の札とあるは、是を寶船と共に賣りしなり、もと二物にて有りしを、やがて、一つにしたるにこそ、今は寶船の繪に、神前の獅子狛犬の如き物二つ向ひ合せて書きたるは誤にて、たゞ獏一をかくべきなりといへり、

◎一原といふ野を行けば、厄拂の聲、夢違ひの獏の札、寶丹賣など、鰯、柁をさして云々、

(好色一代男一夜の枕物ぐるひ)

附記 和漢三才圖繪

本網獏似熊而頭小、脚卑、黑白、駁文、毛淺、有光澤、或云黃白色、或云蒼

白色象鼻犀目牛尾虎足多力能舐食銅鐵及竹骨蛇虺其骨節強直中實少髓其糞可爲兵切玉其尿能消鐵爲水其齒骨極堅以刀斧却碎落火亦不能燒人得之詐充佛牙佛骨以誑徃諺

獬皮 爲坐毯臥褥寢獬皮避溫癘濕氣邪氣圖其形亦避邪唐世多畫獬作屏風

(チ) 呪厭凶夢 春日社に「丑ひつじ」と紙に書きて多くおせりこれ悪夢の時の呪なり御驗記にも繪にうつしたればふるき事なるべしとぞ

(リ) 夢魘 俗に胸に手をおきて寝又梁の下に寝ぬればおそはるといふは久しきならはし也『源氏物語』御幸卷に夢にとみしたる心ちして侍てなんむねに手を置きたるやりに侍と申給ふ『湖月抄』におびゆる心なりとあり(中略)又俗に左右の手の拇指を屈して四の指にておさへて寝ぬればおそはるゝ事なしといふは『病

源候病^{三十}云卒魘者屈也謂夢裏爲鬼邪之所魘出也養生方導引法云拘魂門制魄戶名曰握固法屈大拇著四小指内抱之積習不止眠時亦不復開令人不魘魅とあり又梁の下に寝る事は文海披沙云今人寢忌壓梁及當戶曰能令人魘不寤淮南子曰枕戶擗而臥者鬼神隲其首則知俗忌久矣千金方云臥勿當舍脊下また朱子語類^{鬼神}云雨風露雷日月晝夜此鬼神迹也此是白曰公平正直之鬼神若所謂有嘯干梁觸干胸此則不正邪暗或有或無或去或來或聚或散者とあり梁と胸とをいへるを見れば上の事をいふに似たり

(梅園日記二卷 二六三)

◎夢に魘はるゝには常に履く木履又は下駄をそのかたぐを裏かへしおけば魘はれずといふ (松亭反古選)

(ヌ) 夢誦 吉夢を見たる時及び凶夢を見たる時に誦するものに種々の文あり又方法ありこれらは醫學博士三浦謹之助氏已に

「日本の夢占に就て」といふ論文に示されたれば、こゝに省略し、只次の二首の歌を掲ぐべし、

『秋齋閑語』に「夢ちがへ」のことを述べて『袋艸子』に、吉備大臣夢違誦文の歌あり、今凶夢をさか夢などいふに同じ、

あらちをの、かるやのさきに立つ鹿も、

ちがへをすれば、ちがふとぞ聞く、

と記し、又『拾芥鈔』には

唐國の、そのゝみたけに鳴鹿も、ちかえをすればゆるされにけり、

の誦文を載せたり、

(ル) 夢語り すべて正夢と思はるゝをば、みだりに人に語るはよろしからず、又人の夢を戯れにもあしさまにいはず、よきにとりなし、いふべきなり、是則言葉の幸ひ助け給ふ上つ代より、皇朝の

ならはしなり、外戎にも『周禮』に「夢者事之祥也」とありて、占夢官もあり『草木子』にもさるたぐひあり、 (傍廡)

◎萩原宗古隨筆に、三日夢をとかずとて、夢を見て三日内は人に語らぬ事なり、夢といふものは空なるものゆゑ、よくとけばよくなる、あしく解ばあしくなる事なり、三日過ては能き事をあしくいひても苦しからず、夫故今の世にても、三日過て人に嘯す事にて云々、北世經^{廿三}

(松屋筆紀 三)

◎夢は三日が大事のもの、 (薩摩歌)

(ナ) 夢ぬしの神 『相模家集』に「うき事を、いそぎも見せんよ」ともに、たゞゆめぬしの神を拜まん」と有り、此夢ぬしの神は夢を主どる神にや (松屋筆紀)

『尚消閑雜記』には戀しき人を夢に見んと思はゞ、夢の妙童菩薩を念ずべしと見えたり、この事は已に序論に於いて述べし所な

〔五〕結論 徳川氏時代三百年間にあらはれたる夢の形式は、前代に比較するに甚しき變化を來さずと雖も、その内容に至りては、社會の狀態、人心の變動に伴ひて變化を來し、神佛の示現に關するものにて、佛の示現は鎌倉、室町時代の如く甚だ多からず、従つて佛法の靈驗に關するものも亦大に減少し、死者の靈に關するものも亦前代と趣きを異にせるは、佛敎の勢力が舊時の如くならざりしを證するに足る、而して新に當代にあらはれしものは、仙翁、浦島太郎、貧乏神等にして、特に神佛の示現、事實の眞相をあらはすものに、戰爭に關するもの復仇に關するもの多きは、社會の狀態を知るの材料とするに足るべし、其他男色に關するものあり、男女の情に關するものあり、中にも夢に切腹を見しことあるは、當代に至りて始めてあらはれし處なり、而して夢を説明

せるものゝ多くあらはれしはこれ實に文化の進みしによるものにして、而もその説明の通俗的なるあり、生理的なるあり、心理的なるあるは、當時の思想の混淆せるを證するに足り、その陰陽の説によるもの多きは、宋儒、性理の説の盛んなるに基くは云ふまでも無き所なり、若夫れ當時に出てたる文學上の著作に、夢を用ゐることの如何によりて、作者の面影をうかがふ時は、馬琴の『八犬傳』はその卷帙の浩漭なるにも關せず、夢を構想の材料とすること多からざるのみならず、之を形容詞として用ゐることも少なきが如く、之に反して、西鶴物に至りては好んで夢字を用ゐしは、これその寫出せる社會の狀態が他と異なるにもよるといふべきか、近松の淨瑠璃は馬琴と西鶴との中間にありて、正に調和をはかりしが如き觀を呈するは亦奇といふべきなり、之を要するに、前代に於ける謠曲中の夢の面影は、近松の淨瑠璃により

て大に發揮せられ、軍記物の夢は亦八犬傳にその面影を寫し、男
色物は西鶴によりて傳へられたりといふべきなり、こゝに徳川
時代の夢の變遷を叙述し終るに際りて、特に夢庵記、夢想記の二
篇と併句とを附記して、夢の名残を惜まんかな、

〔附記〕

夢庵記は肖柏の作にして、その全文を左にかゝぐべし、
宗吐渡唐し侍し、彼國にて、夢庵の二字を仲和といふ友人の能書
にかゝせて、もて來り侍り、思ひかけぬ事にて、感情淺からず、
かしこしな、もろこし迄も筆にさへ、きゝてそめける夢の庵は、
又宗輔、同心に、此庵號唐筆を見せ侍し、人の國まで思忘ざりける
事とおほえて、

水莖に、かけし契やたぐひなき、みぬ唐の夢の庵を、

草庵のさま、四隣に長松花樹めぐりて、前庭に大なる巖あり、臥龍
のごとく、猛虎に似たり、海邊の石、あひまじはる、其中に紅梅軒に
近きあり、あしやの里より、はるばる移し來りて年をかさぬ、横斜
三四丈にをよべり、傍に井あり、綆のながき事數尋、桐葉おほひに、
暑を避にたよりあり、四時の花、萬木にたえず、是をもてあそびて、
晨夕老を忘る、よて書院を弄花軒と號す、

夢ながら、心はとめじ老らくの、夏さび來ぬる山の岩木に、

夢想記は玄旨法印の記する所なり、その文に曰く、

慶長のはじめの年仲の冬、大坂の亭にうつりおはしまし、頃、奇
瑞の靈夢を感ぜらるゝ事あり、其和歌に曰く、

世をしれど、ひきぞあはする初春の、松の緑も住吉の神、

凡、靈夢あり、喜夢あり、昔黃帝夢に華胥氏の國に遊ぶ、さめての後、

天下大に治れる事、彼境のとしといへり、又殷高宗の良佐をえて
 國家盛なりし事、めでたき夢のためしなり、中につきて、松は十八
 公の名あり、是又丁固が夢に感ぜし嘉兆にあらずや、抑住吉御神
 は、西の海遠き、しほ路よりあらはれ出て、近きさかひに跡をたれ
 給へり、唯この我朝を鎮護し給ふのみにあらず、遂に異國征伐の
 御ちかひ専らなるが故に、神功皇后の三韓を平げ給し時も、此御
 神殊に威猛を施し給へりとぞ、されば、此秋津洲、四の海波の聲せ
 ずして、こまもろこしも靡き従ひ奉る事、ただ此時にあり、其久し
 き行さきを思ふに、住吉の松に、小松の蔭を並べつゝ、一木一本に
 千世を數へても、猶かぎりなき御齡なるべし、今この事をきくに、
 をろかなる心にも悦びにたえず、いさゝか筆をそめて、祝詞を奉
 るといふとしかり、

住吉の神の恵もあらはれて、君が八千代を松のことの葉、

旅にやみて、夢はかれ野をかけめぐり 芭蕉

夏草や兵どもが夢のあと、 芭蕉

月は今宵よいは扱宰予が夢、 宗因

鮪つほや、果敢なき夢を夏の月、 芭蕉

* * * * *

結論

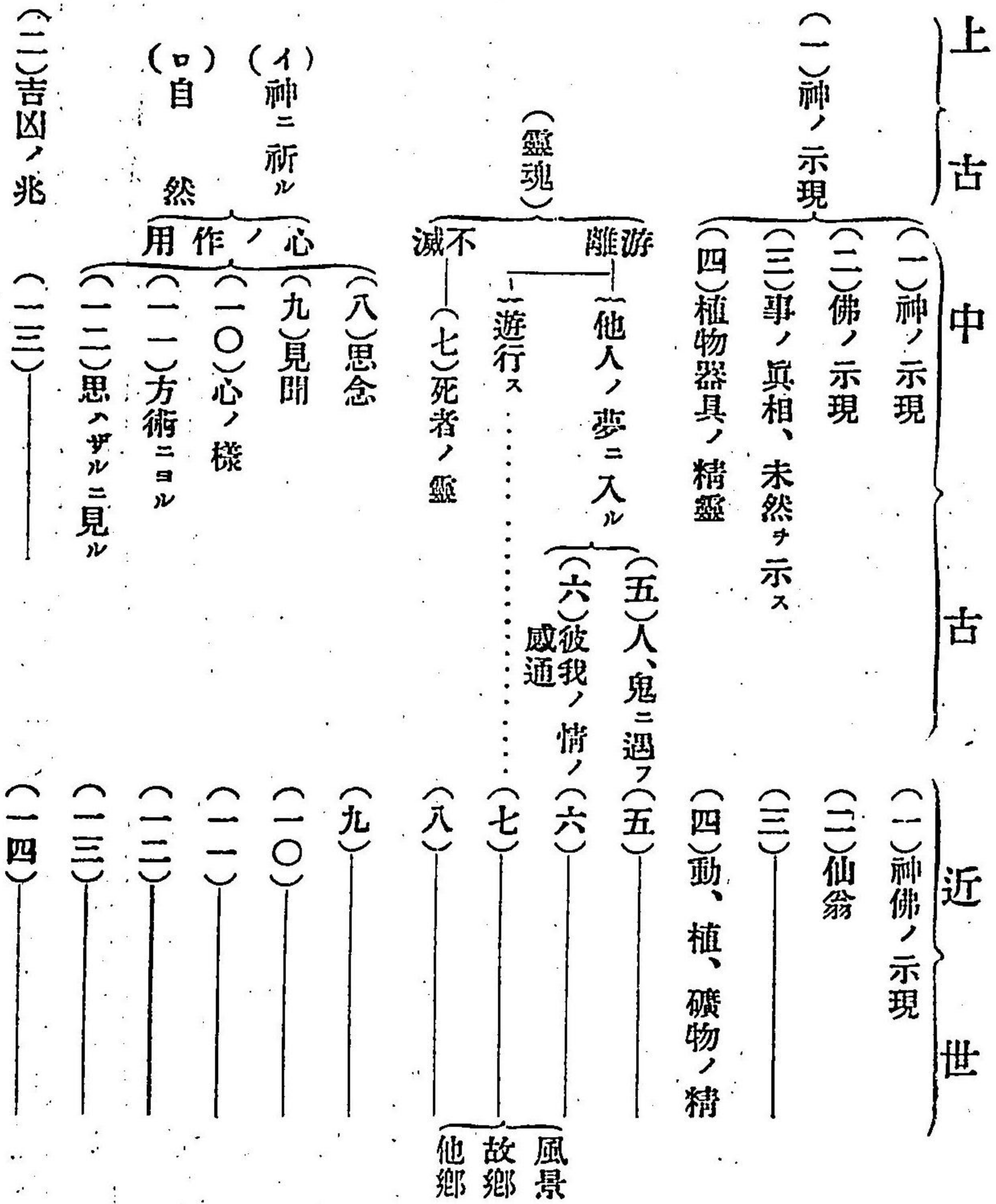
一、夢ノ變遷

(一)總説 上下幾千年短しとせず、その間にあらはれたる記録に存する夢の主なるものは、略之を収録して分類し、以てその内容形式の變化せし跡を明かにするを得たり、而してその變化を來せる主要なる原因を尋ぬる時は、(一)社會文化の發達(二)國民思想の變化に基き、而もこれら社會、國民の思想、文化は、亦人類自然の進歩及び外國思想、文化の影響によるものなることは、論ずるまでも無き所にして、その大概は已に各時代の條下に於いて論述せし所なれば、今は國初より現代に至るまでを通じて之を統括し、以て夢の内容、形式將た之に對する思想變遷の狀態を論述すべし、

(二)形式 上古時代に於いて、最も早く現はれしは、神が分明に現はれて啓示するものにして、その啓示は事實のまゝなるを常とす、之に次ぎて神に祈りて示現を受くるものには、神があらはれずして單に比喻を以て示すものあり、尙單に吉凶、禍福の前兆をあらはすものあり、別に神の示現に關するものにして、夢中に神より授かりし物が、現實に存在するものあり、要するに上古時代の夢の形式はこの外に出でず、而して更に深く推究する時は、魂魄が肉體より離れて遊行するものあり、崇神天皇の二皇子が、御諸山に登れることを夢みたりしが如きは即ちこれなり、されども、後代のものとはその趣きを異にする所あるを以て、別に分類の目を立てず、中古時代に入りては、これらの形式の外に、佛の示現に關するもの、人、鬼、死者の靈、其他動植、礦物、器具の精靈の夢を現するもの、龍王、鬼神、天狗等のあらはるゝあり、加之、夢中に問答

するあり、詩句和歌を詠ずるあり、靈魂、肉體を離れて遊行するあり、方術によりて、人爲的に夢を現ずるあり、事實の真相を告げ、未來を警告するものあり、降りて近世時代に至りては、仙翁の夢を現ずるあり、かくの如く時代を経るに従ひて、形式の分化を來せる所以のものは、これ人智漸く發達し、社會の狀態、益復雜に赴き、特に外來思想の影響を受けしによるものにして、もし單に各時代に於ける個々の形式のみを取つて之を考察する時は、何等の系統も無きか如くなれども、よく深くその因りて來る所を推究する時は、上古時代にあらはれたる根本的形式か、種々の影響を受けて分化せし跡を明かにすることを得べし、今試みに、之を圖によりて示せば、實に次の如し、

夢ノ形式ノ分化ノ系統



結論

上古に於ける國民の思想はいふまでもなく神てふ觀念と、靈魂といふ觀念とが中心となれることは、已に序説に述べし所にして、而も人間の靈魂は神と來往、感通し、且肉體を離れて、夢中に容觀的經驗をなすものと信じたりしが如く、即ち神の示現の形式の中には、靈魂の游離、來往、感通を豫想せるものといふべし、これらの思想が中古時代に入りて、支那、印度思想の、天人合一、靈魂説等の影響を受けて變化し、多くの形式に分れしものにして、人、鬼、靈魂、動物、器具の精、彼我の情、仙翁等が夢を現ずるは、神佛の示現の形式に含まれたるものが分化せるに過ぎず、神に祈る形式は、思ふこと、及び方術によりて夢みるとその形式を同じくし、亦事實の真相及び未然をあらはすものは、その裏面には神佛の示現てふことを豫想せるは、容易に推究するを得る所なり、

(二)内容 夢は思想が中心となりて、之にその時代の社會の事象

を材料として、構成せられたる現象なれば、その間に系統の存するあるは固よりなるも、思想の方面は主に形式をかたちづくり、内容は社會事象に關すること著しきが故に、形式の如く單純ならず、從つてその變化の系統を明かにすることは、容易ならざるものありと雖も、今各時代に於ける變化の主要なるものに就いて、その一斑を示すべし、

(甲) 上古時代

上古時代に於ける夢の内容について、その主要なるものを擧ぐれば、次に示すが如く、殆んど神秘的のもののみにして、

- 一、疾病ハ神意ニ出ヅ、故ニ神ヲ祈ラバ治癒スベシ、
- 一、神ヲ祭ラバ海外ノ國歸伏セン、
- 一、國ノ治亂ハ神意ニ出ヅ、故ニ國ノ治マランコトヲ欲セバ神ヲ祭ルベシ、

- 一、神ハ比喩ヲ以テ吉凶ノ前兆ヲ示ス、
- 一、神ハ夢裡ニ現物ヲ授ク、
- 一、神ハ未然ヲ豫言ス、
- 一、土木ニ人ヲ犠牲トスレバ、工事成ラン(神意ニ出ヅ)
- 一、器具ニモ之ヲ司ル神アリ、
- 一、人ノ忌ム事物、場所ヲ夢ミル時ハ凶ナリ、
- 一、動物ニモ夢アリ、

これらの思想は永く國民の間に存して、幾多迷信の根原となるもの多し、

(乙) 中古時代

中古時代、奈良、平安朝時代を通じて、その主なるもののみを擧ぐれば次の如し、

- 一、梅花、琴ノ精靈ガ夢中ニ語り、且和歌ヲ詠ズ、

(上古ニハ、器物ヲ司ドル神ガ出デ舞ヒシノミニテ、未ダ語リシコトナシ)

- 一、死者ノ怨靈ガ來リテ、生前嫉カリシモノヲ殺サントス、
- 一、自己ノ靈魂ガ、他人ノ夢ニ入り、又自己ノ靈魂ガ身ヲ離レテ遊行ス、

- 一、八幡神、我國ハ昔ヨリ只人ヲ君トスルコトハ未ダナキ事ナリ、横サマナル心アル人ヲハ速カニ、ハラヒ除クベシト示現アリ、

- 一、佛、牛ニ化シテ寺ノ建立ヲ助ク、
- 一、菩薩、女ニ變ジテ好色ノ若キ僧ヲハゲマス、
- 一、極樂ニ向フ、
- 一、猫ガ、前生ニハ人間ナリシコトヲ語ル、
- 一、神ガ國守ニ恩ヲ報ス、
- 一、前生ニ佛ヲ多ク作りシ功德ニヨリテ、人ト生レ來ル、

一、龍宮ヨリ召ス、及ビ龍王示現ス
 一、蛇、華嚴ノ護神ナリト告グ、

一、一串ノ青珠四十五顆アルヲ授ケテ、命數ヲ知ラシム、

此等の中にて、佛、菩薩、死者の怨靈、極樂、前生、命數等に屬するものは、佛敎の渡來によりて新たに加はりし思想に基き、植物、器物の精靈に屬するものは、漢文學の影響に加ふるに、佛敎の草木、國土、悉成佛などの思想の影響なるべし、尙龍宮に關する思想は、本邦上古より己にあらはれし所にして、靈魂に關するものも、亦固有の思想なれども、中古時代に入りては、儒、佛兩敎の影響を受けしは明かなり、

(丙) 近世時代

この時代にはあらはれしものの中に、主要なるものは次の如し、
 一、御幣紙、打まきを賜ふ、

一、熱田神モ、法華經ヲ讀ミテ法樂セントセシ僧ガ、コノ答ヲセントテ、國司ニ生レ來テ、ソノ僧ヲ追ヒシ宮司ヲ捕ヘシナレバ、我が力及バスト告グ、

一、父ノ亡靈、未然ヲ知ラシム、

一、鬼神、文章家ノ家ノ前ヲ、無禮ニテ過グベカラズトイフ、

一、冥土ニ行ク、

一、僧、新羅明神ノ眷屬ヲ嘲ル、

一、生ル、子ノ男女ヲ知ル、

一、藥師佛、コノ病ハ醫師ニ就クベシ、我が力及バズト告グ、

一、嚴島明神、平家ヨリ節刀ヲ召シ返サセテ、賴朝ニ賜フ、

一、重代相傳ノ鎧、辻風ニ吹カレテ四散ス、

一、地獄ヨリ惡人ヲ迎ヘニ來ル、(鬼、火ノ車)

一、天狗、

- 一、天女神女、
- 一、鼠、猫、アラハレテ説法ヲ受ク、
- 一、朝鮮ニ行ク、
- 一、富士石、夢ニアラハレテ所在ヲ告グ、
- 一、軍法ヲ授カル、
- 一、姫神、水戯水馬ノ術ヲ教フ、
- 一、エビス神、福ヲ授ク、
- 一、貧乏神、祭ラレテ嬉シガリ、繁昌サスベシト告グ、
- 一、切腹、
- 一、土ノ鼠、木ノ馬腹ヲ喰ヒ破ル、
- 一、亡靈、俳諧ノコトヲ語ル、
- 一、浦島太郎、
- 一、紙鳶ニ乘リテ遊行ス、

- 一、男ノ靈魂、容貌ノコトヲ語ル(男色)
- 一、我身犬ニ化ス、
- 一、父ノ仇ヲ討ツ、
- 一、源平ノ戦、
- 一、仙翁、
- 一、龍、
- 一、美面鳥、
- 一、亢龍、

此等の中「御弊紙」、「打まきは、陰陽道の行はれて、迷信の甚しかりしに基つき、亡靈、冥土、鬼、火の車、等は佛教思想に出でしは明かにして、熱田神も力及ばず、僧の新羅明神を嘲るなどは、佛教の勢力の盛んなりしを證するに足り、鬼神、天狗は支那思想の影響なるべく、天女神女、姫神は、印度思想に、本邦の思想の混じたるもの

なるべく、浦島太郎は本邦の傳説にして、夷神、貧乏神は彼我思想の混じて生ぜしものなるべく、仙翁はいふまでもなく支那思想に基けるなり、龍に至りては上古已に見る所なるも、この時代に至りて、益分明となり、瑞相をあらはすものとせるは支那思想にして、馬琴の『八犬傳』には、具さにその状態を寫し出せるは人の知る所なるべし、其他、切腹、仇討、源平の合戦等は皆その當時の事象に基けるはいふまでも無き所にして、男色行はれて男子の容貌のことを夢に見るあり、俳諧行はれて、其道を語るあり、之によりて察するに、社會の状態は、少なくともその面影を夢の現象に於いて認むることを得べし、

(三)説明　こゝに説明といへるは、單に記録に見ゆるもののみをいふに非ずして、その時代の國民が、夢を以て如何なる現象なりと考へしか、換言すれば、夢に對する當時の思想をも包括せるも

のにして、上古、中古時代の如きは、夢に關する記事及び他の材料によりて推定するの外なきなり、而して上古時代に於いては、神といへる觀念は、すべての思想の中心となり、天地万物、身體靈魂は皆この神の造る所、夢中に神の啓示の存することを信ずるか故に、縱然神が現はれずして見るものと雖も、之を以て嘗て自己の思念に基くものとなさずして、悉く神が比喻を以て未來を警告するものとなしたるが如し、これ當時に於ける一般の信仰なりしなり、而も獨り我が國民のみに非ずして、ロンプロゾーも、地球上に生存せる國民は、何れの時、所を問はず、夢中に神の啓示の在ることを信ずるは神の存在を信ずるよりも多しといへり、かくの如くなるを以て、夢の吉凶、夢の占ひてふことは、上古已にこれあり、中古時代に至りてはこの思想の外に、人の靈魂、死者の靈、動植物、器具の精靈、及び佛の示現を以て夢の元因となし、且方術

によりて、人爲的に夢を現ずることを得るものとするに至れり、而してこの時代に於いて稍見るべきは、夢は思念することあるにより、又時としては思はざるに見ることあるを知るに至れる事これなり、然れども夢の説明をして益、神秘的たらしめしものも、亦この時代に至りてあらはれたり、即ち佛教と陰陽道の如きこれなり、こゝに於いてか夢は神の示現の外に、佛、高僧の加はるあり、鬼神に基因するものありて、一層迷信の度を高め、凶夢を變じて吉夢となし、甚しきは他人の夢を取るに至る、夢がたり夢ちがひ、夢買等の語は、この時代に至りて始めて見る所なり、

近世に至りても、其説明は依然として神秘主義に傾き、夢の効験を信じ、夢によりて懺悔せる者さへあり、但し武士にして夢見物忌に心を惑はすは嗚呼の至りなりといひしは、さすがは武士たるの本性をあらはせるものにして、夢の説明に一步を進めた

りといふことを得べしと雖も、これ只少數のものに止まり、一般には尙神秘主義の行はれたりしなり、徳川時代に至りては、その説明は大に進歩し來りて、心理的説明を見るに至りしは、本論に於いて叙述せる所によりて明かなり、これ佛教從來の勢力を失ひて、儒學勃興し、之に加ふるに洋學の輸入せるあり、人智の發展、社會文化の進歩を來し、によりてなり、されども從來の神秘主義が、全く跡をおさむるに至らざるのみならず、之を信ずるもの意外に多きは抑何故なるか、蓋し宇宙は尙秘密にかくれたるもの多く、詩人は之を美的に觀察し、宗教家は之を神秘的に悟了し、以て人心に偉大の感化を及ぼすに由るといふべきか、而して高僧、貴人等の出産と夢との關係は已に述べし所なるも、尙英雄、豪傑、其他高僧、貴人は、常に夢によりて神佛の示現を受け、或ひは事實の真相を知り、未來を知り、時に瑞相の夢中に現はるゝことあ

り、空海、最澄、及び頼朝の臣盛長の夢の如き即ちこれなり、これによりて、夢を神聖なるものとせるは、古今を通じて存する所の思想なることを知るべきなり、

(四) 語義 夢に對する思想の變遷につれて、夢といふ語の意義にも、亦變化を來したり、今これらの一斑を、時代を追うて叙述すべし、

(甲) 上古時代

上古時代には、睡眠中に見る現象そのものを指すのみにして、未だ之を他の意義に用ゐたりしものを見ず、その字は「夢」と書き「イメ」と訓したる所あり、

(乙) 中古時代

(一) 奈良朝時代

『萬葉集』には「伊米」寝目「夢」と書き、其意義は、夢の現象そのもの

を指すもの最も多けれども、亦、形容詞として現實ならざる意に用ゐるものあり、夢可登情班の如き即ちこれなり、

(二) 平安朝時代

ユノ時代ニ入りテハ語義ニ變化ヲ來シ、之ヲ形容詞ニ用キテ種々ノ意ヲアラハスニ至レリ、今ソノ意義ノ異ナルニヨリテ分類スル時ハ、次ノ如シ、

一、現實ナラザルモノ、從ツテ確實ナラザル意ニ用キタルモノ、

○忘れてはゆめかと思ふ、 (伊勢物語)

○夢の心地、 (枕草紙)

○ありし世は夢に見なす、 (榮華物語)

○常に夢のやうなる事どもをうけたまはる、 (落窪物語)

○おぼつかながら夢のやうになむ、 (宇津保物語)

一、果敢ナキモノ、頼ミ難キモノノ意ニ用キタルモノ、

◎見はてぬ夢ぞ、はかなかりける、

(天和物語)

◎はかもなき夢をだに見ず、

(和泉式部日記)

◎夢をはかなみ、

(古今集)

◎夢の世、

(榮華物語)

◎世は皆夢幻の如し、

(唐物語)

一 僅少ノ意ニ用キタルモノ、

◎夢ばかり、寝ると見えつる手枕の袖、

(和泉式部日記)

◎さらに、夢にも知らず、

(宇津保物語)

一 名残惜シキモノ、意ニ用キタルモノ

◎夢のやうなる出會、

(源氏物語空蟬)

◎夢の名残

(榮華物語衣の珠)

一 寢ヌルト同義ニ用キタルモノ

◎夢も結ばず、

(源氏物語明石)

◎夢をだに、見るべき程もなげに、

(全 橋 姫)

一 迷ヒ、本心ナラザル意ニ用キタルモノ

◎夢路に迷ふ、

(更科日記)

◎さまざま方なき夢に惑はれ待る、

(源氏物語椎本)

一 アサマシキ意ニ用キタルモノ

◎夢の心地して、あさまし、

(海氏物語夢浮橋)

一 アヤシキ意ニ用キタルモノ、

◎夢と覺えて、いとあやし、

(源氏物語蜻蛉)

一 哀レノ意ニ用キタルモノ、

◎夢のやうに、哀なる物語り、

(源氏物語橋姫)

一 隔テナキ意ニ用キタルモノ

◎夢のやうにうちとけし夜、

(鮫 詞)

一 禁止ノ意ニ用キタルモノ、

◎夢々たがへ給ふな、

以上は國文學に現はれたる夢の意義の變化を示せるものにして、夢に厭世的の意義を有するに至れるは、佛教思想の影響なり、特にこの時代に至りて、強く制止の意に用ゐる「ゆめ」努力が『萬葉集』にも勤などの字を當て、その語原を異にするものなるにも關せず、『狭衣』には「夢々」又「夢」の字を當て、殆んど「夢」の意義の轉用の如くなれるは、注意を要する所なり、思ふに「夢」にも「な」などか、僅少の意を有するより、自ら「少しも」せぬなどと、殆んど禁止に近き意義をあらはすより、かゝる混同を來せるならんか、謠曲松山鏡にも、亦「夢おどろかし給ふな」と用ゐたるあり、

(丙) 近世時代

(一) 鎌倉室町時代

此時代に入りては、前代と比して一層佛教思想の影響を受け

しことは、經文中にある語句の多く用ゐられしを見ても明かなり、之が爲に、世の無常或ひは迷ひの形容に充てしもの多くして、厭世的の意義著しくなれり、而して意義の上に、新に變化の跡を認むべきものは、夢を「情」の意及び「未來」の意に用ゐたるにあり、尙左に分類して示さん、

一 現實ナラザル、確實ナラザル意ニ用キタルモノ、

◎ 只夢の御心地にぞましましける、 (源平盛衰記)

一 果敢ナキモノ、頼ミ難キモノ、意ニ用キタルモノ、

◎ 夢は、はかなき事なり、 (保元物語)

一 僅少ノ意ニ用キタルモノ、

◎ 夢ばかりの浮世のすさび、 (四季物語)

一 名残惜シキ意ニ用キタルモノ、

◎ 夢の名残、 (とりかへばや物語)

一 寢ヌルト同義ニ用キタルモノ、

◎砧の聲御寢の夢を覺す、

(源平盛衰記)

一 迷ヒノ意ニ用キタルモノ、

◎有りと思ふは夢に夢みる、

(源平盛衰記)

一 未來ノ意ニ用キタルモノ、

◎夢想の記なり、

(保元物語)

一 情ノ意ニ用キタルモノ、

◎心の底の夢、

(新古今集)

(二) 徳川時代

この時代に至りても、別に意義の新らしきものを見ず、只前代の種々なる意義の派生が、一層固定せるのみなるが如し、但し夢を男女の情の意に用ゐることは、已にこれありしも、この時代に至りては、西鶴が男女合衾の意に用ゐしは、つゝましくいひし意

義を、明からさまにせるものといふべし、即ち、「夢見よかと入りて、汗を悲しむ所へ云々」唯看夜々多情夢、「枕のさけ夢もかはさで」の如きこれなり、

二 夢ト宗教トノ關係

宗教は、ハルトマンの説に従へば、人類が宇宙の絶對的本體に對する關係にして、其本體は人類の精神生活の根本にして、又最高の目的たるべきものなり、而してその神の本質は、人により將た時代によりて大に異なるものあるも、上古時代にありては、何れの民族も超絶的人格の神の存在を信じたりしことは、已に述べし所にして、この信仰は夢によりて得たる所多きのみならず、神意は亦夢を通じて知ることを得べしとせり、是に於いてか、夢と宗教とは密接の關係を有するに至る、今我國に於ける二者の關係を視るに、已に各時代の處に示せる如く、神佛の示現に關す

るものは甚だ多く、特に佛教については、中古以後、本地垂跡の説を始めとし、其他堂塔の建立、佛像の造營等殆んど夢中の示現に基因せざるはなし、而して試みに民間信仰の著しきもののみを取つて、之を分類する時は、

一 夢ハ神佛ノ示現ナリトシ、若クハ夢中ニハ神佛ノ啓示アリトセルモノ、

一 佛教ノ靈驗ガ夢ニ現ハル、モノ、

(イ) 唯識論、法華經、等ノ靈驗、

(ロ) 錫杖、數珠等ノ靈驗、

一 靈魂不滅ノ夢ニ現ハル、モノ、

(イ) 死者ノ靈ノ現ハル、モノ、

(ロ) 冥土ニ行キテ死者ニ遇フモノ、

一 輪廻轉生ノ說ノ夢ニ現ハル、モノ、

(イ) 前生ニ動物タリシモノガ、佛ノ名號、誦經ノ聲ヲ聞クニヨリ今生ニ人間トナレルモノ、

(ロ) 佛界ニ生ルベカリシニ、妄執ノ念ヲ起シタルニヨリ帝王(人界)ニ生レシモノ、

(ハ) 八葉ノ蓮座ニ上ラントシテ、一門ノ惡行ノタメニ成佛スル能ハザルモノ、

(ニ) 後世ヲ弔ヒシ利益ニヨリテ、變生男子ト生レシモノ、

(ホ) 嫉妬其他妄執ノ念、法力ニヨリテ成佛スルモノ、

(ハ) 惡行アル者ハ地獄ニ落ち、善行アル者ハ極樂ニ行クトスルモノ、

一 死者ノ靈ハ夢中ニ未來ヲ警告ストナスモノ、

一 神佛ハ夢ニ比喻ヲ以テ禍福ノ前兆ヲ示ストスルモノ、

以上の如きものあり、此等の思想は、多く佛教の影響に出づる

ものなれば、その人心に感化を及ぼせることの甚だしかりしと共に、夢と關係することも亦大なりしを知るに足らん、之を要するに、何れの宗教も、靈能ある神佛の實在せることを信ぜしむるに、夢の神秘的現象が與つて力ありしは、古來の宗教上の傳記等によるも明かなる事實にして、ロンプロゾーが或ひは神の存在を信ぜざるものあらんも、夢に神の啓示のあることを信ぜざるものは少なしといひしは、已に夢によりて神の存在を信ずることを豫想せるものにして、よく宗教と夢との關係の深きを言明せるものといふべし、

三 夢ト迷信トノ關係

迷信は之を主觀的よりいへば、信仰の一種にして、迷悟を判つことは甚だ困難なりと雖も、之を客觀的にいふ時は、其時代の人文の進歩に一致せず、即ち科學哲學等の範圍に於いて、確然たる

知識信仰の求め得べきにも關せず、猥りに情的に傾き、理外の理を信じ、或ひは推斷の精緻を缺ぐより來る所の繆見にして、之を廣義と狹義とに分つことを得べし、所謂狹義の迷信とは宗教及び人事の吉凶禍福に關するものにして、之を神秘的迷信と名づくるを得べし、ヘツケルが科學的信仰と全く性質を異にして、常に奇蹟を信じ、理性の自然的信仰と相容れず、超自然的事實を信ずるもの、即ち諸種の宗教に於いて、現象の説明に之を利用する觀念、これ狹義の信仰にして、所謂迷信なりといへるは即ちこの意義なり、

夢は從來多くの學者によりて、研究を企てられしも、尙未だ明確ならざるものありて、動もすれば神秘主義に傾くを免かれず、上古にありては夢を以て超自然的人格的の實在となしたるあり、且多くは夢の現象によりて超自然的神の實在を信じたりし

なり、かくの如くなるを以て、迷信と夢との間に密接なる關係を有するは、固より當然なり、左に夢中にあらはれたる迷信の中、特に著しきものを示して、その夢との關係を知るの參考に供すべし、

- 一、疾病ハ神意ニ出ヅ、
- 一、國ノ治亂ハ神意ニ出ヅ、
- 一、土木ニ人ヲ犠牲トス、
- 一、器具ニモ之ヲ司ドル神アリ、
- 一、人ノ情ハ夢ニヨリテ感通ス、
- 一、靈魂不滅、
- 一、劔太刀ヲ身ニ添フト見ルハ、思フ人ニ遇フ祥瑞ナリ、
- 一、匣ヲ開クト見ルハ、他人ニ洩シタル兆ナリ、
- 一、植物、器具ニ靈アリ、

- 一、動物ノ怨靈崇リヲナス、
- 一、佛、牛、女、ニ化ス、
- 一、天變ハ神意ニ出ヅ、
- 一、死後、地獄、極樂ニ行ク、
- 一、亡者ノ惡靈、崇リヲナス、
- 一、前生ニ功德ヲツメバ、動物モ人ト生ル
- 一、龍宮ニ行ク、
- 一、華嚴ノ護神、蛇トナリテ現ハル、
- 一、命數ヲ知ル、
- 一、鬼神ノ實在、
- 一、天狗、人ヲ誑カス、
- 一、夢ハ未來ノコトヲ知ラシム、
- 一、靈魂ハ肉身ヲ離レテ來往ス、

- 一、夢ハ凶ヲ變ジテ吉トスルヲ得ベシ、
- 一、凶夢ハ呪ニヨリテ之ヲ祓除スルヲ得ベシ、
- 一、他人ノ吉夢ヲ取ルコトヲ得ベシ、
- 一、方術ニヨリテ、夢中ニ情ヲ通ズルヲ得ベシ、
- 一、神佛ハ夢ニヨリテ豫言警告ヲナス、
- 一、神佛ハ比喩ニヨリテ啓示ス、

之を要するに、夢は迷信の根本要素たる超自然力の信仰を生ぜしむる主要の媒因にして、超自然力は亦夢によりてその實在を表示するものなりといふべく、希臘羅馬の古代に於ける詩人が、常に夢を人格視し、夢は一の神なりとし、哲學者プラトンは、夢によりて將來を知ることを得とせるなど、彼と是とを比較し、來れば、迷信と夢との關係は、何れの民族に於ても、密接なりしを知るべきなり、

四 夢ト文學トノ關係

文學は人心の反映なりとは、人の常にいふ所なるも、人心の反映たるものは、獨り文學のみに限れるに非ずして、只人心の一部の反映たるに止まり、而も純文學は實用を主とするに非ずして、専ら美的の要求より發現せしものなれば、文學を以て、文人てふ藝術家によりて、製出せられたる美術品なりといふことを得べし、已に美的要求より現はれしものといへば、單に感情の方面のみの反映なるが如きも、之が製作品として發現するに當りては、美の本質をあらはすべき條件として、思想、想像の助けを借らざる可らざるは、固よりなり、

而して夢も亦人心の反映にして、思念する所、感ずる所、要求する所は、皆夢中の現象となりて現はる、此を以て、行素なれば夢も亦清しといへる者さへあり、加之、夢に思想、想像の作用あること

は實に驚くべきものありて、現實に思うて得ざる所、之を夢中に得るものありしは、古來その例に乏しからず、かゝる方面より視る時は、夢と文學とは更に異なる所なきが如きも、文學は人心のある要求より現はれしものにして、夢は心理作用として、何らの目的なく、要求なく、必然的に起る非現實の現象なれば、固より同一の價值あるべきに非ず、

予が夢と文學との關係を論究せんとするは、かゝる方面に於ける考察に基けるには非ずして、文學が美術品として製出せらるゝに際り、夢の現象を如何に假用して、美的要求を充たしたるかを知らんとするにあり、蓋し人生は活劇の舞台にして、美はこの活劇たる人生生活の間に於いて、實現せんとする理想の最大要素なるのみならず、他の一面より視る時は、人生は亦秘密によりて充されたる境涯なりといふことを得べし、かゝる境涯を寫

し出して、美的要求を充たさんためには、夢の現象を捉へ來りて、或ひは悲劇の主人公をして、夢裡に一條の活路を見出さしめ、或ひは葛藤の裏面に伏在せる秘密を知らしめ、時には榮華に飽き足れる者をして、神の示現に未來を警告せしむることあるべし、かくの如くにして、構想の上に美的要求を充たすことを得べきもの、蓋し尠なからざるべし、これ純文學に於いて、夢の多く用ゐらるゝ所以なり、今我國文學に於いて、構想の上に夢を用ゐし變遷の状態を察するに、中古、奈良朝時代に至りて、歌謠の中に之を用ゐること多く、もし之を散文とする時は、その構想の大に見るべきものあり、即ち夢に思ふ人來れりと見て、搔き探れども手にも觸れずして落膽するあり、夢に消息を得て急ぎ行かんとする折しも、使者の來るあり、相思の人と夢中に相遇うて喜ぶあり、夢に見ゆるのみにて現實に遇ふ事能はざるをかこつあり、其他、夢

中の事象に、とあらん、かくあらんかと心を悩ますあり、平安朝に入りては、物語類の出づるありて、『伊勢物語』には、早く、女のもとより夢に見えつるよしをいひ送れりといふあり、『源氏物語』に至りては、葵の巻、須磨の巻、朝顔の巻、若紫の巻など、夢によりて心緒を語り、或ひは未來を豫知するなど、大に進歩の状を認むるを得べく、特に夢の浮橋てふ巻の名さへあらはるゝに至り、これより後の文學に多大の影響を與へしものゝ如し、『濱松中納言物語』は全篇殆んど夢によりて筋を立てたるが如く、近世、鎌倉、室町時代に至りては、『住吉物語』とりかへばや『物語』等、皆夢に托して佛の利益を現はし、人生の秘奥を語らざるは無く、お伽草子に至りては、『猫の草紙』の如き、全篇、夢中の問答より成り、後の徳川時代の小説類に、夢を用ゐることの發達せんさまを豫言せるの感を起さしむ、其他軍記物語の中にも、亦夢を用ゐざるもの殆んど無き

は、深く怪むに足らざるなり、之を要するに、夢の文學に於ける關係は甚だ密なりといふべきなり、

ダンテが不朽の名作たる『ヴィタ、ヌーヴァ』を繙きし者は必ず思ひ浮ぶるならん、彼が意中の戀人たりしベアトリヌが永くこの世を去りし日、彼は愛の神に導かれて、已に彼の世界の人なるベアトリヌの許に至りし當時の、夢中の靈妙なる感想を描出せる所を讀んで、或ひはその愛といへる切なる情緒にのみ感を惹くものあらん、而もこの時に當りて現實ならざる夢てふことが、如何に詩的情緒に感動を與ふるかを見よ、光源氏が須磨、明石のあたりに謫居せる時、むすぼゝれる心の中にあらはれし夢は、如何に彼をして無聊を慰藉せしめたりしかを思ひ見よ、所詮現實的の人生は非現實的の夢と相待つて生命あるもの、人生を寫出する純文學が夢によりて大に詩的趣味をあらはすことを得るは、もとより然るべき所ならずや、

五 夢ト人生、

シエークスピアは嘗て歌うて曰く、

We are such stuff. As dreams are made of;
and our little life Is gounded with a sleep.

人生は果して悲觀的のものなるか、將た樂觀的のものなるか、その終極の彼岸は何れにあるか、吾人之を知らざるなり、或ひは比するに夢を以てするも、夢想國師は

夢のうちは、夢と思ふも夢なれば、ゆめをまよひといふも夢なり

夢の中と、思ふも今のまよひかな、もとのうつゝのなしと聞には

と歌へるに、あらずや、よし人生は夢なるにもせよ、或ひは *Petronius* がいひし如く、役者を演ずるのみにせよ、人生の眞意義は *Goet-*

he がいへる如く

„Im Ganzen. Guten, Schoenen Result in Leben,

善美の生活を遂ぐるにあり、換言すれば人生とは活動なり、物質的の活動にあらずして精神的活動なり、この活動あるが爲に、幾千万年の昔より永續して現時に達することを得たり、將來とてもこの活動のある限りは、人生も亦未來永劫絶ゆることなかるべし、

已に活動が其本體なりとせば、苦樂は糾へる繩の如く、相錯綜するは自然の勢にして、而もその活動の終極の目的は何れにあるにせよ、或ひは向上の目的は歸する所想像にして、蓮生坊の如く、前を見ずして只後ろをのみ見て進むものなるにせよ、活動の一階段ごとに、快感の伴ひ來るは事實なり、もしこの意味を以てする時は、人生は樂觀的なりといふことを得べく、予は常に、しか

く信じて疑はず、思ふに彼の複雑なる社會の事象、意識は、皆吾人の祖先以來活動せる成果にして、政治、文學、宗教、美術は實に人間活動の華ならざるは無く、社會の意識と稱し、輿論と呼ぶものは亦活動の精華にして、天といひ命といふ、亦これこの意識、輿論の外に在るにあらざるなり、こゝを以て天は自ら作る所にして、亦自らもその一部をなすものなれば、徒らに身の不遇をかこつべきに非ず、活動して以て命を待つべきのみ、天は自ら助くるものを助くとはこの謂ひに外ならず、

こは人生の一面を觀じ來りしものなるが、更に他の方面より觀るときは、人生は演技にして、吾人は社會といへる舞台に立ち、技を演じつゝある役者の如く、その晴れの舞台に立つ間は即ち覺醒時にして、樂屋の裡にある間は即ち夢境なり、樂屋は、役者がすべての準備を整ふる所、如何に觀客をして涎を流さしむべ

きかを巧む所の祕密の場所にして、亦一面には自由を得る所、勞苦を慰する樂天地なり、夢も亦實にこの樂屋と異なるなく、觀客の意識は已に眠つて心を置くべきものなく、こゝに於いてか、「イデー」の役者は各その理想を實現し試みるを得べく、不平あるものは大に怒鳴るを得べく、悲しき者は泣くべく、嬉しきものは舞ふべく、欲する所は求むるを得べく、文學者、美術家は佳句、名作を試みるべく、宗教家は神の郷に遊ぶを得べく、その自由にして樂しきことを思へば、永く眠りの覺めざらんこそ望ましきことなるべし、

此の如く夢は人生活動の半面に於ける休息の樂天地にして、亦祕密の宿れる所なり、活動の元氣を養ふ所なり、神人融合の場所なり、されば、タルチニイは夢中に惡魔の曲を作り、ゲーテは自己の著書「プロメトイニス」中の思想の大部分は、睡眠中に得たるも

のなりといひ、アリストテレースは夢に神が「インスピレーション」を與へ、勇氣を鼓舞し、忠告を與ふるとをなし得るものとせり、述べてこゝに至れば、夢と人生との關係は甚だ深きものなるを知るべく、もし人生の中より夢を取り去らば、恰も荒涼たる秋の野原と化し去らんのみ、シャツプリアンが、人生に於いて神秘的のものよりも、一層麗はしく又やさしく、而も偉大なるものは他にこれ無しといへるは、正に肯綮を得たる言といふべし、長く古人の夢路をたどり來りて、こゝに筆の杖を擱かんとするに當りて、夢主の神靈、忽然現はれ來りて、次の詩句を與へて消えぬ、

中く、に、浮世は夢のなかりせば

忘るゝひまもあらましものを

* * * * *

何にかは、うつゝのうさも慰まん

夢みるほどのなき世なりせば

* * * * *

夢路をぞ、はかなき世には頼むべき

思ひあはするかたも有けり

* * * * *

夢とのみ、過にし方はおもほへて

覺てもさめぬ心ちこそすれ

* * * * *

うき世をば、何によそへて悟らまし

夢ぞまことの、みちに有ける

Wie träumte, die Sonne glühte
 Von blauen Himmelst
 Ich aber stand als Blüte
 mitten in greifenfeld.
 Die reifen stehen nicht,
 Von goldenen Säulen schwer,
 Sie nicht und Sie bilden
 Verumbert zu mir her.
 Sie sprachen: „Wir haben uns wieder
 Die Welt zu regnen beunruhigt,
 Und du?“—Ich schmitte den yder
 Und blühe bis ich verflücht.

Julius Sturm „Wir träume.“

附 録

夢に關する材料を涉獵せる中に、修辭にかゝるものあり、之によつて夢が文學の上に如何に用ゐられしかを知るを得べく、且作者の面影のほの見ゆるものあれば、附録としてこゝにその一部を載することとせり、尙夢の内容の概括せるものをも索引を兼ねて掲げたり、

一 夢ト修辭

(甲) 國文學ニ見エタルモノ
 (イ) 平安朝時代

伊勢物語

- ◎ ゆめぢをたどる
- ◎ ゆめばかり
- ◎ まことならぬ夢
- ◎ ゆめをあはす
- ◎ ゆめかうつか

文學全書

- 丁數
- 二九
- 三〇
- 三〇
- 三〇
- 三九

附 録

二八五

◎ゆめうつし
◎忘れてはゆめかと思ふ

大和物語

◎たびねの夢

◎春の夜の夢

◎見はてぬ夢ぞはかなかりける

◎ゆめに見えつや

蜻蛉日記

◎夢のさとし

◎見し夢を遠へ詫ぶ

◎夢は通路ありといふ

◎夢をも佛をも用うべしや

◎夢の通路絶ゆ

和泉式部日記

◎夢よりもはかなき世の中

三九
四八

二七

一四

五四

全

一〇五

一七九

一

◎はかもなき夢をだに見ず

◎夢ばかり寝ると見えつる手枕の袖

◎夢ばかり涙にぬると見つ

◎寢覺の夢

宇津保物語

◎さらに心にては夢にてもおろかなるまじけれど

◎夢の通路だになし

◎おぼつかながら夢のやうになむ

◎夢ばかりおぼえたるもなし

◎さらに夢にも知らず

◎こと人には夢に聞ゆべき人もなし

◎めるまなくなげく心も夢にだにそうやとおもへばまどろまれけり

俊蔭の巻

二一

二四

四三

四九

内侍のかみ

一六五

嵯峨の院

一八九

祭の使

二五七

櫻のうへの下

八二一

大観

四〇

全

三〇

四

◎夢にも見せぬ
落窪物語

附録

◎常に夢のやうなる事どもをうけたまはる

更科日記

◎夢路に迷ふ

◎かゝる夢の世をば見ずもやあらまし

◎夢ときもあはす

枕草紙

◎夢の心地

紫式部日記

◎夢のやうに

◎夢路にまどはれしかな

◎見給へん夢にてもちり侍らばいみじからん

源氏物語

◎夢とのみたどられ

◎夢のやうなる出會

◎夢合する者を召す

◎霜後の夢

◎夢も結ばず

◎何れを夢とわきて語らん

◎夢語り

◎夢ともなく容貌ほのかに見ゆ

◎むすぼゝれつる夢

◎萬の事夢のやうにたどられて

◎夢の心地してあさまし

◎今宵は夢にだにうちとけても見えず

◎夢と覚えていとあやし

◎夢の心地ぞする

◎夢見さわがしく見えさせ給ふ

◎夢にも人に知られ給ふまじささま

◎夢のやうにて

◎波の響に物忘れうちしよるなど心解けて夢をだに見るべき程もなげに

- ◎あやしき夢がたり 橋姫 一三
- ◎夢のやうに哀なる物語り 同 二五
- ◎思ひさまさん方なき夢に惑はれ侍る 椎本 三六
- ◎あやしく夢のやうに覺ゆれど 總角 二六
- ◎夢かとおぼして 同 八五
- ◎夢かと覺え給ふ 藤裏葉 九
- ◎夢の心地して 同 一七
- ◎哀なる夢がたりも聞えさすべきを 若葉下 六三
- ◎あけくれの空にうき身は消えなくん夢なりけりと見てもやむべく 同 六三
- ◎夢のやうに思ひ給へ飢るゝ心まどひに 柏木 一七
- ◎夢にも知り給はず 添標 二一
- ◎夢のやうになんと聞えたり 關屋 四
- ◎夢に亂れたる所おはしまさゞんめれば 乙女 二三

狭衣

大觀

- ◎曉になむ夢々たがへ給ふな 一ノ下 四九
- ◎心得ぬ夢とありしは如何なりけるにか 五ノ下 五六
- ◎何事よりもかの夢のおぼつかなさ 五ノ上 五九
- ◎いとかく思へば夢にも見ゆらんかし 二ノ上 八八
- ◎心の中をだに夢ばかりいひ知らせ奉らず 二ノ下 一一三
- ◎夢のやうなりしよなよな 三ノ上 一三六
- ◎夢語り 一五一
- ◎夢路に惑ひ給ひしまし所 三ノ下 二〇七
- ◎招くとも靡くなら夢しのすとき秋風吹かぬ野邊も見えぬに 三ノ下 二一〇
- ◎夢のしるべのまねしたるになりぬべし 同 二一一
- ◎夢にだにかばかりのけぢかき程にてはなし 同 二一五
- ◎夢ばかりもおぼしいづとよ 二二六

- ◎春の夜の夢にかわらず 六五
- ◎いかに見し世の夢にかあるらん 六六
- ◎ゆめまぼろしかかげろよか 一三一
- ◎夢の心地せらる 一三二
- ◎遙なる夢のうちの契 二〇五
- ◎さんいふの春の夢 二二九
- ◎うたゝねの夢のゆかり 二三〇
- 堤中納言物語 四六
- ◎昔夢見し初よりも云々 四〇
- 唐物語 四五
- ◎世は皆夢幻の如し 四二
- 榮華物語 三一
- ◎夢の世 三五
- ◎夢の現になりたる心地 同
- ◎ありし世は夢に見なす 石 一

浦々のわかれ

同

石 蔭

- ◎夢の中の夢のやどり 本 二〇
- ◎思ひかけぬ夢 楚王の夢 八
- ◎夢の名残 衣の珠 三八
- ◎あわれにいみじき御心ざしをこの中將ゆめにまぼしたらず 大鏡

- ◎吉左右の夢 一一九
- ◎夢の如くにてうせ給ふ 一九三

今昔物語

◎夢ばかりも験なかりけり

古今集

◎夢のたいぢ 藤敏行

◎夢のかよひぢ 同

◎夢をはかなみ 業平

艶詞 大観

(口) 鎌倉室町時代

とりかへばや物語

◎夢のやうなり

◎夢を見る心地

◎夢の名残

四季物語

◎亡魂の行きかふ夢の浮橋

◎七日の御會も夢路の中に過ぎぬ

◎夢ばかりの浮世のすさび

野守鏡

◎御夢想

◎みぬ夢を見たりといはゞ

轉寢記

◎夢の心地なむしける

◎夢現ともわきがたかりし宵のまより

二九四
全書

三七
一三八
二一四

大觀

一
四
二七
四一

一三

◎さすがにたえぬ夢の心地

◎夢のやうに見置きし山ぢ

◎夢の通路たえはてぬべし

十六夜日記

◎夢ばかりも

◎しのぶ昔の夢の名残

◎浮世の夢やさめがゐの水

◎はかなしやたびねの夢に迷ひ來て

◎なほ夢の心地して

◎語れば近きいにしへの夢

保元物語

◎夢想の記なり(中略)御夢にも常に御覽じけん

◎如夢幻泡影は金剛般若の名文なれば夢ははかなき事也

◎過にし方を思へば昨日の夢の如し

平治物語

全書

一
二〇
二〇
五

全書

九〇
一七
一〇〇

◎夢さめて参る
◎不思議の夢想を蒙る

平家物語

◎春の夜の夢の如し

◎まどろめは夢に見え

源平盛衰記

◎旅泊夜深幽月照懷郷之夢

◎崩れつる岸も我身もなき物を有りと思ふは夢に夢みる

◎夢も現も憑しく

◎忘れがたきは撫育の昔の恩夢の如く幻の如し

◎もし夢ならば覺めて後如何せん

◎昔般宗夢中得良駒今朕夢後失賢臣

◎砧の聲御寢の夢を覺す

◎只夢の御心地にぞまし／＼ける

◎夢幻の世の中有るかとするれば更になし

九一

一一三

九卷 五六

文庫

卷三 六七

卷九 二二六

同 二二二

卷十 二五五

卷十一 二七二

卷十一 二九二

卷十二 三二二

卷十二 三二五

卷十八 四八七

◎三年の戀も夢なれや

◎只夢のやうなりしことどもなり

◎夢か現かあけ兼ねて

◎嵐松を吹く時は妄想の夢必ず覺ひ

◎旅寢の空の旅なれば夢を夢見る心地にて打まどろむことなし

◎何となりぬる有様ぞ夢かよ／＼といひ乍ら

◎旅寢の夢も覺めぬべし

十訓抄

◎夢後郭公

◎夢と知りせば覺めざらましを

新古今集

◎しらぬ夢路

◎結ばぬ夢をとふ

◎夢かよふみち

卷十九 (四九七)

卷三十 (七九二)

卷三十八 (二〇〇三)

卷四十 (二〇五二)

卷三十四 (三一五一)

卷四十七 (二二三四)

卷四十八 (二二八〇)

全書

五二

一〇七

公家經

攝政太政大臣

藤有家

實家

馬内侍

土御門内大臣

通光

慈圓

讀人不知

賀實

讀人不知

赤染衛門

全書

三三三五六六

◎心の底の夢

◎うたゝねの夢

◎かねごとを夢になす

◎忘れぬ夢をふく嵐かな

◎須磨の關夢をとほさぬ

◎夢をうつゝにさましかぬ

◎來し方を夢になす

◎頼む浮世夢の行末

◎夢や夢現や夢とわかず

秋夜長物語

◎夢想

◎巫山の神女か雲となり雨となりし夢の後のおもかげ

◎我をまよはしつる夢のたゞちに少しもたがはず

◎これや夢ありしやうつゝわさかねて

◎夢かうつゝかのおもかげ

◎らんふうの夢さむ(一本紫蘭の夢)

◎夢のたゞちもうつゝ少なし

◎浮世の夢さめくとして

鳥部山物語

◎見はてぬ夢の心地しながら

◎黒の衣色ふかくねぬ夜の夢もさめけるにや

今物語

◎むかへに御車を遣されたりけるゆめうつゝともわさかねつらむ

◎うつゝにも夢にも今は問ふ人のなき

◎たゞ一夜の夢の契を結びまゐらせてける

徒然草

◎あかずをしと思はゞちとせを

◎過すとも一夜の夢の心地せり

◎まどひの上にあへり酔のうちに夢をなす

鴉鷺合戦物語

大觀

一一二二七

全書

一一三二〇一三三

- ◎夢幻泡影の如し 一
- ◎恨にうちねぬ程の關守に夢路さへ隔つる中となれり 一
- ◎先師聖靈有爲の夢早覺めて 六八
- ◎魂魄は曹來りて夢眼にだに入らず 六八
- ◎有爲の樂は夢の瑪なり 六九
- ◎盧山の雨の夜草菴の中、白髮青灯萬慮空し具葉寒残りて坐に作夢、青年の心事樹頭風 六八
- 太平記 九三
- ◎巫山の神女雲となりて夢の面影を留む 十五卷 三七
- ◎めてたき夢 二十卷 一四
- ◎黄梁の夢 二十五卷 一九
- ◎聖人に夢なし 同 一九
- ◎癡人の面前に夢を説かず 一 二三
- 増鏡 一 二三
- ◎程なう明けぬる夢の名残 一九五

- ◎ほどなくうせぬ栗田の關白のかくれ給ひにし後、夢見ずとなげきしもの
し心ちぞする (二九九)
- ◎猶夢かとおぼゆ (三四六)
- ◎夢の心地して (三五五)
- ◎夢うつゝともわかぬ程に (三七三)
- ◎源氏の大将須磨の浦にて父御門見奉りけむ夢の心地し給ふもいとあは
れに (全)

- ◎夢かとお覺えし (三八三)
- ◎松殿の御子もろいへの大臣夢のやうにて、しかも一代にてやみ給ひにき (九三三)
- ◎夢とだにさだかにもなきかりふしの草のまくらに露ぞこぼるゝ (二九二)
- 吉野拾遺物語
- ◎夢のやうになむ侍る (四六)
- 謠曲
- ◎夢もかすそふかり枕 熊野 (三八)
- ◎甘泉殿の春の夜の夢 同 (四〇)

- ◎世の中は夢か現か
 - ◎思ひ寐の夢
 - ◎煩惱の夢を覺す
 - ◎夢にも知らず
 - ◎夢の浮世の中宿
 - ◎夢の世
 - ◎夢のちぎりを待たう
 - ◎夢人の跡吊ふ
 - ◎聖人に夢なし誰あつて現と見る
 - ◎浮しと見し世も夢つらしと思ふも幻
 - ◎世の中のうつる夢こそ誠なれ
 - ◎夢も數そふ假枕
 - ◎三年の秋の夢ならばうきはそのまゝさめもせて
 - ◎酔ひ伏す夢の覺むると思へば
 - ◎酔ひに伏したる枕の夢
- 善界 (七二)
 - 三井寺 (八七)
 - 同 (八六)
 - 鶺鴒飼 (一一〇)
 - 頼政 (一一八)
 - 土車 (六六)
 - 同 (六六)
 - 夕顔 (二二六)
 - 清經 (二五二)
 - 同 (二五二)
 - 同 (二五五)
 - 砧 (二五八)
 - 同 (二五九)
 - 大瓶猩々 (一九四)
 - 猩々 (二〇九)

- ◎世は芭蕉葉の夢の中に牝鹿の鳴く音は聞き乍ら云々
 - ◎夢に夢見る心地して
 - ◎夢か現か覺束な
 - ◎石山の鐘の聲夢をも誘ふ風の前
 - ◎一生夢の如し誰あつて百年を送る
 - ◎妙なる一乗妙典の功力を得んと懺悔の姿夢中に猶も顯はすなし
 - ◎覺めぬさきこそ夢人なる物
 - ◎夢の契りをうつしに返すよしもがな
 - ◎うれしや夢の契りの假初ながら
 - ◎胡蝶の夢の戯なり
 - ◎胡蝶の夢に遊ぶぞ今日の現なる
 - ◎あだし世の夢待つ春のうたゝね
 - ◎夢路も添ひて故郷に歸るや現なるらん
 - ◎はをなぐるまの夢の夜
- 芭蕉 (二〇)
 - 草紙洗小町 (三五)
 - 姨捨 (六四)
 - 源氏供養 (八九)
 - (九〇)
 - 錦木 (二〇〇)
 - 同 (二〇二)
 - 生田敦盛 (二五六)
 - 胡蝶 (二六二)
 - 飛鳥川 (八六)
 - 同 (二六二)
 - 柏崎 (二六四)
 - 當麻 (二八六)

◎御夢想

誓願寺 (一七)

◎御夢相

道明寺 (九六)

◎世の中の夢現、昨日にかはり今日にさめ幻の夢も幾度ぞ

祇王 (四九)

◎常樂の夢

高野物狂 (五八)

◎問はず語りの夢

須磨源氏 (六三)

◎昔を戀ふる忍びねの夢

鸚鵡小町 (八一)

◎夢もどろかし給ふな

松山鏡 (九三)

◎往事渺茫すべて夢に似たり

松山鏡 (九三)

◎夜半の内なる夢幻の一睡の内を佛もあるまじ

佛原 (四七)

◎もし夢ならば如何にせん

土車 (七一)

◎夢幻泡影如露亦如電

谷行 (一一八)

◎驚く春の夢の中

雲雀山 (二七二)

◎彼郡聊の假枕夢は五十のあはれ世のためしもまことなるや

女郎花 (二六)

◎夢も現も幻も共に無常の世となして跡も残らず

定家 (二七)

◎夜の契りの夢の中(葛城ノ神ノ故事)

同 (二八)

◎一生は風の前の雲夢の間に散じ易く

鐘 燧 (二九)

◎逢ふさへ夢の手枕

繪 馬 (三六)

◎空目せしまに夢となる

半 蔀 (四五)

◎又寐の夢を待つ

雲林院 (二二七)

◎夢路を出づる曙

盛 久 (二五一)

◎衰朽の夢を見る

切兼曾我 (二七五)

◎夢の浮橋とだえして

碁 (八四)

◎夢に道行く心地

刈 萱 (二〇九)

(ハ) 徳川時代

年山紀聞

◎さらぬだに、打ぬるほども夏の夜の夢路をさそふ山ほととぎす (小谷御方)

◎夏の夜の夢路はかなき跡の名を雲井にあげよ山ほととぎす (勝家)

風俗文選

◎鎌倉は郡の名にして、大織冠鎌子丸の時、靈夢によつて鎌を埋むの地也

◎高館の夏草に、兵共が夢を驚かす、

(鎌倉賦序並許六)

◎馬さしの聲に夢を破る

(旅賦並引許六)

◎楚臺の夢は一夜の枕に驚き、驪山の契は萬里の雲を隔つ

(同上)

◎亦寢の夢のさめ時は、腹の減期を相圖とおもへり

(百鳥譜支考)

◎されど柏木の衛門の夢、虚堂和尚の詩

(出女説木導)

◎ある書に曰く、東坡夢に人家にあそぶ、堂西に小園あり、古井の石上に石芝あり、上

(祭猫文小序支考)

に紫藤を生ず、折て喰ふ、味ひ鶏蘇の如し、予が五老井の上に艸字藤あり、其西に紫

芝岡あり、されば、坡翁が夢は、余が五老の地なる事明かなり、

(紫芝岡賛許六)

八犬傳

◎夢の浮橋中絶ゆる歎を知らぬが歎の一つ

(三十五回)

◎共に閃く太刀音は、無常迅速、薨歎とばかり、

(三十八回)

◎夢にだも知らざれば

(四十四回)

◎今將夢歎幻歎、

(四十九回)

◎そも亦夢の跡もなく大人共侶に滅失し歎

(同)

◎是も夢歎とまだ覺めぬ無明の醉に忙然たり

(同)

◎これを夢とも現とも思ひ得がたき親女房の疑を解かんとて

(同)

◎蘆生が夢を一炊のあはれふりたる蜩の色

(五十二回)

◎佛説に聞く泡沫夢幻、頼むに足らぬ事ながら

(五十九回)

◎初めて夢の覺たる如く

(六十五回)

◎はや引容るゝ夜衾裏、甚麼なる夢をや結びけん

(六十七回)

◎开も亦南柯の夢に似て

(百二十九回)

◎夢ならて覺て恠しき鬱悒

(八十二回)

◎正夢

◎初は宛夢に似て思ひ辨くよしなかりしに

(百四回)

◎里人の家もなければ、況んや酒沽る又六が門などは夢にだも見がた

かるべし

(百九回)

◎夢かと思へば臥房にあらず、現かと思へば覺えずしてかへり來れり

(百十四回)

◎爰こそ假寝の夢ばかりよと密に才覺して、微なる亭に入れば云々

(好色一代男はにふの寢道具)

◎こはき夢見ては申々と起せしこと (同) 髪きりても捨てられぬ世

◎夜半に捨子の聲するは母に添寝の夢の浮世と小町が詠みし言の

葉も思出され (同)

◎夢にも知らず (同)

◎夢を覺させ (同)

◎夢心に胸騒ぎ (同)

◎夢見よかど入りて汗を悲しむ所へ云々 (同)

◎終夜夢も結ばず枕躍 (同)

◎思はしからぬ夢見る時御立と庭かに呼立つる (同) 五

◎或時は夢、或時は幻、又現に見えて (同) 六

◎夢にもせよ、是があるこそ不思議 (同) 六

◎珍しき蜘蛛がくくと申されければ世之介夢驚き嫌な事と起上り (同) 六

◎優しきお言葉を聞寝入にして結構な夢を見る事ぞかし (同) 七

◎客の衣紋坂までは夢も覺めざりしが (好色二代男) (一)

◎結めば柴の庵崩せば、舊の野原夢の假枕も無し (同) (四)

◎昔は玉花金殿の眠も夢に變りて (同) (五)

◎入子鉢の明空を枕にしたも夢幻の春じやもの (同) (五)

◎見ぬ中に覺めたる夢とも申すべし (同) (八)

◎心の友を同行して見ぬといふ里もなく、行かぬ山路もなく、一年の夢

に暮れて云々 (同) (八)

◎獨手枕の夢も未だ見ず (好色一代女) (三)

◎夢を胡蝶にまけず (好色五人女) (一)

◎四辻の犬さへ夢を見し時 (同) (三)

◎只十露盤を枕に夢にも銀もふけのせんさくばかり (同) (三)

◎僧中驚かし聞けるに (同) (四)

◎さてもく取集たる戀や哀や、無常なり夢なり、現なり (同) (四)

◎夢心になりて行く (本朝二十不孝) (三)

◎夢の中にも胸を定め (同) (三)

- ◎夢幻と思定めし世中 三二二
- ◎夢遊程なく名の夢になり給ひ 同 (三)
- ◎迥の後に夢覺めて歎くに効ぞなかりき 同 (四)
- ◎母は七ツの鐘の鳴る時夢の如く果てられ 同 (五)
- ◎さればはかなきは人の身、詩人は枕夢夕日と作れり、歌人は假のやどりの曙ともよめり 同 (五)
- ◎今年二十一期として、夢また夢、眠れる如く腹搔切てうせぬ、 男色大鑑 (二)
- ◎唯看夜々多情夢、 同 (二)
- ◎夢に現を見る心地して 同 (四)
- ◎天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ 同 (五)
- ◎夢は明方の風呂敷 日本永代藏 (二)
- ◎戀も夢、無情も夢、情もきのよの夢にくれて、思ひしもかはゆきも美もあもはくも皆夢ぞかし 置土産 (二)
- ◎夢の情の祭わたして出づ 好色三代男 (二)
- ◎枕のさけ、夢もかはさて 同 (三)
- 同 (四)

近松時代、世話浄瑠璃

- ◎戀に亂るゝ妄執の夢を覺さん 曾根崎心中 (三)
- ◎せめて心が通じなは、夢にも見えてくれよか、 同 (二三)
- ◎妾も夢の相伴と追へてこそは入にけれ 薩摩歌 (六三)
- ◎そも一睡の假枕、皆一心の鬱結結を結びて有磯海夢か現か幻か、同 (八五)
- ◎先のが真か是が夢か、何れが夢やら誠やら 同 (八六)
- ◎夢は三日が大事のもの 同 (八七)
- ◎思へは、夢の間の悲しさが、真の夢なら如何せうぞ、夢が合ふたら如何せうぞ 同 (八八)
- ◎祖父も祖母も夢心地 重帷子 (二四五)
- ◎房が思ひの通ふかや夢とはなしに現なや 重井筒 (三〇七)
- ◎此よな事降湧ふとは夢にも知らず 淀鯉出世瀧徳 (三二八)
- ◎空に暮せし年月の榮華は夢の盃の醉醒枕 同 (三三一)
- ◎光る君の渡つた夢の浮橋六十帖を渡り詰め十帖と詠じた、 同 (三三二)

- ◎夢にもしらがの母者人のお出じや 淀鯉出世瀧徳 (三三三)
- ◎夢見た様な事どもやな 同 (三三五)
- ◎夢現ともわきまへず 堀川波の鼓 (四〇七)
- ◎小判壹兩與ふれば夢かと思ふ顔つきにて 同 (四一八)
- ◎我陥分けて我迷ふ夢の中戸の夢枕 夕霧阿波鳴渡
- ◎怖怯れたる夢物語御咄申上げ 傾城酒吞童子 (四九二)
- ◎作法は夢にも知らぬはにや 同 (四九二)
- ◎夢の心地にて 同 (四九三)
- ◎今明し合ふも深い縁と身を寄せ玉へば敷妙夢かと身も震はれ 日本武尊吾妻鑑 (五八七)
- ◎添寝の夢の妬まし 同 (五九五)
- ◎夢殿に心を澄し座禪なさるゝに俗人の樂が入ることか夢殿はかこつけ、后達だちとの慰みに極つた 聖徳太子繪傳記 (六四九)
- ◎夢に夢見る御涙 同 (六五〇)
- ◎夢殿の外を夢と御覽じて夢も一如ぞと見ひらき給へば天上も下界

も爰に遠からず

同 (六八四)

◎誠や夢か悲しやと云々

源氏十二段長生島夢 (七一〇)

◎囃せや囃せ鼓草しめて寝なくん夜はいつか昔語となりはてゝまろ寝ばかりの常世草夢見草より其外は色見草とてあらばこそ、 同 (七二七)

◎又立寄て門の戸をうつゝか夢か明けやらぬ恨みを殘して歸りけり、 室町千疊敷 (七四九)

◎影の如くに顯はれしは夢か現か 同 (七八四)

◎ありつる礎の枕の上に睡の夢は覺めにけり 同 (七八九)

◎討つも討たるゝも夢の夢覺れば敵もなき浮世 吉野忠信 (八一〇)

◎實にや蘆生が見し榮華の夢は五十年其邯鄲の假枕一睡の夢の覺し、 最明寺殿百人上臈

も粟飯炊ぐ程ぞかし、 同 (八五八)

◎寝て夢にも昔を見るならば慰むこともあるべきに、 同 (八五八)

◎寝られねば夢も見ず 同 (八五八)

◎切盤百人前を夢の間に仕立濟して息休め、 堀山姥 (八七二)

◎風常樂の夢を破る 同 (九〇二)

◎死して程経る繼信、是にありとは夢ばし見たるか

門出八島 (九三五)

◎御手に鼓のうつゝか夢、

室町千疊敷 (七八五)

◎慶覺はつと御目をさまし見れば夢とも面影は此處にありく、苛責の現相

同 (七八九)

◎ころりと側に寝たばかり夢にも逢瀬なかりけり

釋迦如來誕生會 (九〇五)

◎實に宵までは錦の褥、玉の床、思へば夢の樂みと

同 (九一六)

◎夢心地

同 (九三三)

◎實にも如夢幻泡影と法の教は聞ながら

凱陣八島 (八)

◎生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし

同 (一一)

◎夢路を辿る如くにて

國性爺合戰 (七六)

◎イヤく母が生緩い、夢にも見、嘆語にも言ふ程魂をうつさねば一才に名は取られず

國性爺後日合戰 (一三〇)

◎何れをさして現とも覺たる我を知らざれば、夢路を夢と誰か知るべき、錦舎が夢の魂の顯れ出て一葉の船に揺らるゝ心地して

同 (一三二)

◎夢心く夢の浮橋長き夜のとうの眠りの日の本に覺やらぬ間の旅

衣、

同 (一三三)

◎夢路は六つに變れども思ひは一つ魂の胸の鏡に映り來る影に形を見るとかや、

同 (一三二)

◎丁固か夢の常磐木は藐姑射の山に枝を鳴さず

文武五人男 (二九二)

◎夢も難波の浦風に霞晴れゆく淡路濱

大織冠 (二八八)

◎御身が母を見ることは今生にてはかなはぬぞ、やれ夢には見えぬか物を言へ、

賀古教信七墓廻 (三九一)

◎何時扱、夢に三吉野を立出是まで參りしに

大磯虎稚物語 (四二三)

◎丸寝する蛸の釣手に風風絶て、夢も我名も靜なる東雲深く眺むれば、

同 (四二八)

◎試しにひげや、梓弓、矢矧の夢の覺やらて

曾我五人兄弟 (五三九)

◎夢にも知らず

曾我虎が磨 (四五九)

◎夢にも見やしめすまい、

平家女護烏 (五七二)

◎邯鄲の枕に五十年の夢を見し、それは唐土、是は又義朝か觸體を枕に

したる一睡に、平家の滅亡源氏の榮を見たること、夢にあらず現にあらず

- ◎宿かる蝶の夢覺し立騒ぐ葉隠れ
 - ◎人間萬事夢の世の夢も夢なり夢の中、
 - ◎夢とも分ぬ古郷の道
 - ◎夢ではないか玲瓏様
 - ◎夢にも存ぜず候
 - ◎夢に夢見る如くなり、
- 平家女護島 (六〇六)
 浦島年代記 (六七二)
 當流小栗判官 (六二九)
 松風村雨東帶鑑 (六九六)
 梶狩劔本地 (七六五)
 大原問答青葉笛 (八一七)
 持統天皇歌軍法 (八八二)

(乙) 漢文學ニ見エタルモノ

懷風藻

- ◎周日載逸老般夢得伊人 悲人遇 藤原宇合
- ◎他郷頻夜夢談與麗人同寢裏歎如實云々 秋夜閨情 石上乙麻呂
- 和漢朗咏集

- ◎華堂夢覺而珠簾未卷
 - ◎夢斷燕姬曉枕薰
 - ◎閨寒夢驚或添孤婦之礎上
 - ◎松寒破旅人夢
 - ◎叫漢遙驚孤枕夢
 - ◎壺中天地乾坤外夢裏身名且暮間
 - ◎通夢夜深羅洞月尋蹤春暮柳門蘆
 - ◎落枕波聲分岸夢當簾柳色兩家春
 - ◎泉飛雨洗聲聞夢紫落風吹色相秋
 - ◎傅氏巖之嵐雖風雲於般夢之後
 - ◎胡角一聲霜後夢漢宮万里月前騰
 - ◎往事渺茫都似夢
 - ◎雖觀秋月波中影未逝春花夢裡名
- 鶴 雲 霜 蘭 鶯
 仙家
 全
 隣家
 山寺
 函相
 王昭君
 懷舊
 無常

新撰朗咏集

- ◎紛閣夢驚傳好晝紅窓燈盡送嬌音

宮鶯囀曉光

村上御製

○金殿夢驚傳好音玉樓鐘動奏清音
 ○曉眼不眠非夢蝶春腰無力欲栖鴉
 ○上陽宮裏天難曙散騎省頭夢易驚
 ○遊子不歸鄉國夢明妃有淚塞垣秋
 ○鄉淚灑霜孤館曉客夢驚雪我樓秋
 ○夢中鄉信驚秋雁窓下林聲帶夜蟬
 ○絡糸響冷秋夢短飲露聲幽晚思深
 ○吟急殘燈光正背夢驚孤枕淚難乾
 ○婦閨枕冷吟風曉孤館夢殘怨雨秋
 ○雪中絕盡幽人夢霜後添來旅雁聲
 ○寡鶴怨長夢自斷寒鳥啼苦漏獨深
 ○入松風響春吹夢落峽泉聲暗灑心
 ○滄浪歌白雪飄曉雲雨夢香風脆春
 ○巫女昔夢憑妄想仙人秋駕隔回乘
 ○若非宋玉家邊女疑是襄王夢裏人

宮鶯轉曉光
 咏柳
 秋深知夜長
 望月遠情多
 月明羈旅中
 寓居
 蟬思蟬聲滿耳秋
 蟋蟀近床聲
 夜寒只聞蟬
 月前聞搗衣
 寒夜撫鳴琴
 全
 花瀧江山衰
 慈意妙大雨
 豐樂宮舞姬

後齊生
 有信名
 源孝通
 佐國通
 楊巨源
 保胤源
 以言胤
 堀河右大臣
 藤知房
 天曆御製
 笠雅量
 江澄兼
 源時綱
 紀家

○花前昔會春夢短月下故情夜淚催
 ○喪馬之老委倚伏於秋草夢蝶之翁任是非於春叢
 ○鄉夢頻催胡馬思橋題不信蜀龍心
 ○一點燈消夢後淚數聲砧冷月前襟
 本朝文粹

舊遊何在哉
 苑裘賦
 言志
 幽隱
 視雲知隱賦
 男女婚姻賦
 山家秋歌
 立神祠
 論運命
 松竹
 貞信公辭關白
 爲一條左大臣辭
 右大臣第三表

爲憲
 中書王
 尾張學士
 前中書王
 江以言
 朝納言
 紀納言
 三善清行
 朝善清
 廣業
 後江相公
 菅三品

附錄

○楚夢而何爲
 ○似覺夢於華胥之天
 ○休世夢斷塵緣
 ○晋后應無人寢之夢
 ○况乎曉夢難成
 ○貞姿入夢知靈効於十八年之後
 ○臥秋月照夢
 ○風雲於殷夢之後

三二二

- ◎家山春夢將遂高枕之襟
- ◎住臣殘夢令臣晏然
- ◎奉勅旨夢中之想經曉猶迷
- ◎每思此事夢驚涕零
- ◎是一夢誤一生之比也
- ◎繡衣之子謝曉夢於往時
- ◎未曾清談遊宴夢想追歡者乎
- ◎繞日夢月之家冠青雲以從事
- ◎未結白鳳之夢
- ◎人定夢成
- ◎若靈夢者有八九
- ◎榮華夢中春爭奈齡空過
- ◎猶覺露地於曉夢
- ◎春夢非長
- ◎經者夢後之精勤以一乘為輿

太政大臣藤原朝臣
上表同第二表
全朝臣上表為清
信公請致仕表
請罷藏人頭狀

後江相公
菅三品
菅贈太相國
源順
江匡衡
藤篤茂
菅贈大相國
江匡衡
後江相公
全
江匡衡
前中書王
橋倚平
江納言
江匡衡

- ◎哀樂如夢未就是界之壽
- ◎從其夢結蘭芬心祈逢矢有身
- ◎百年偕老之契不異夢路之花
- ◎新聲婉轉夢哉非夢哉
- ◎通夢於波郵則航溟之路易迷
- ◎冷々兮驚晚夢青雉之尾拋扇者也
- ◎至如夫千丈智警斷盡夢後之腸撥枝夕鳴徹入眠中之聽凜々然秋思之難禁也
- ◎鈞天宴闌玉漏夢半
- ◎遂使白樂天三友之居閑夢難結謝安石善妓之處幽思更催者也

後江相公
慶保胤胤或順作云
後江相公
菅贈大相國
紀在昌
江以言
紀納言
菅輔昭
橋正通

凌雲集
◎幽園獨寢危魂壓單枕夢啼粉顏穿
文華秀靈集

小野岑守

◎一朝銜命遠離別上月春初風尚寒欲識我魂隨子去羈亭夜々夢中春
附錄
三三三

○班秩邊城久夕來夢帝畿
 ○片時枕上夢中意幾度往還塞外途
 ○唯餘舊時當猶入夢中看
 經國集

○溪泉欲洗夢心聲夜來坐念因緣理
 ○一生一別難再見非夢思中數々尋
 ○如夢如泡電影賓
 ○涅槃非實道尊象是夢金
 ○曉來莫驚單宿夢他鄉覺後不勝憐
 ○莫怪腰圍疇者異昨來入夢君容悴
 ○即將因夢尋聲去只爲愁多不得眠
 ○人間遊兮絕不夢
 ○周星殞夕漢夢發符象譯之編爰傳
 抹桑集

紀末守
 仲雄王
 巨識人
 全

皇帝
 空海
 全
 滋貞王
 全
 惟氏
 滋貞王
 滋善永
 栗原年足

三三四

○驚駘晚路夢熊羆三十年來一鼻兒
 ○龍尾舊行應斷夢鶴頭新召不驚情
 ○枕上心閑歸夢斷如何白首老青溪
 ○戀君欲趁夢中路請問悠悠海驛程
 ○夢中艷藻雖吞鳥筆下彤雲不讓龍
 ○八斗才多稱器量九升情動惱夢魂
 ○若訝本從何處得江淹枕上曉夢中
 本朝麗藻

都良香
 江相公
 全
 全
 全
 全
 全
 全

○入夢終踰万里波中略仲尼昔夢周公久聖智莫言時代過
 ○再入君夢應決理當時風月必誰過
 本朝無題詩
 ○再會爭期夢裡身
 ○嬌婦破夢聲屢苦
 ○家鷄一報驚夢冷
 ○枕棹通宵不結夢

藤爲時
 中書王
 藤基俊
 三
 中原廣俊
 藤原周光

附錄

三三五

- ◎暮雨滂沱窓戶夢，曉霜蕭颯管絃遊
- ◎驚眠破夢不才身
- ◎柴戶引嵐秋有淚，茅簷納月夜無夢
- ◎風夢鄉心急自絃，晴雲水深歸夢斷
- ◎鴛子樓邊晴後夢，華陽洞裡晚來霜
- ◎燕姬禱練驚殘夢
- ◎二三更霽閑中夢，五十年秋老底腸
- ◎罷夢礎聲寒處々，度秋鴈點白蒼々
- ◎歌琴不斷夢殘程
- ◎忘想夢空觀念曉
- ◎隣杵万聲罷夢聞，想像故鄉其處々
- ◎驛館夢殘腸欲斷
- ◎終夜罷夢空乞巧
- ◎燕寢早醒未結夢
- ◎雨飄隻戶破孤夢

三三六
 全 藤原在良
 藤原周光
 全 全
 大江匡房
 中原廣俊
 藤原周光
 藤原有信
 中原廣俊
 釋道禪
 中原廣俊
 藤原茂明
 惟宗孝言
 法性寺入道

- ◎夢驚情韻廻庭水
- ◎春天孤夢覺猶難
- ◎老蓬鬢悴罷殘夢
- ◎偏感莊周夢作蝶
- ◎未識是非夢蝶心
- ◎旅鴈夢難結寒
- ◎孤夢易驚怨月礎
- ◎五夜清涼難結夢
- ◎夢斷哀鴻迷朝霧
- ◎夢驚千里寒鴻音
- ◎枕前夢謝揚家風
- ◎閑園夢斷幽人枕
- ◎雲鴈聲々破夜夢
- ◎鐘磬聲幽旅夢破
- ◎冬夜蕭々夢難結

三三三
 三 法性寺入道 宮
 藤原實光
 惟宗孝言
 藤原通憲
 藤原季綱
 藤原敦光
 源經信
 藤原周光
 藤原明衡
 大江佐國
 中原廣俊
 全 法性寺入道
 藤原茂明

- 鴛衾一襲霜中夢
- 世上塵緣難絕夢
- 怨遺獨耻空千歲夢短猶悲是一生
- 夜夢頻驚風樹音 八句母在堂故云
- 塵事測茫夢覺曉風吟蕭灑葉落昏
- 古洞嵐疎空破夢
- 紅粉花飛埋曉夢
- 礎寒易破幽閨夢
- 人事變衰都似夢
- 野村礎怨夜夢虛
- 堰水夜聲歸夢破
- 一生但恨類夢仙
- 夜憶還鄉纔入夢
- 觀身自悟人間夢垂老漸忘世上榮
- 七十生涯曉夢虛

大江匡房
藤原茂明
通憲
周光
法性寺入道
敦基
周光
敦基
釋蓮禪
廣俊
周光
全禪
蓮禪
敦光
宗光

- 多宵結夢未吞鳥近日非秋誰聽虫
- 松門夢斷遠鐘盡
- 詩酒可忘夢裏苦風波難忍世間情
- 罷夢嶺嵐來梵宇
- 香口曉夢通嶺月
- 鐘磬報聲夢獨驚
- 俗界塵勞夜夢空
- 聲來曉枕洗夢水影入晚窓當眼山
- 前非零落悉如夢

孝言
法性寺入道
全周
光周
敦基明
法性寺入道
全
茂明
蓮禪

二 夢ト物名

夢といふ語の付きたる地名人名事物等の中にて有名なるもののみを示せば次の如し

ゆめぬしのかみ

夢を司どる神ならんといふ相模集に

うきことを急ぎも見せんと、夜とともに、たゞゆめぬしの神を拜まむとあり、

ゆめのたましひ

魂の夢中にさまよひ出づるものにして玉葉集に「さえはてし身こそは灰になるとも、ゆめのたましひ君にあひそへ」といへるあり

ゆめの浮橋

大和國吉野川のゆめのわたりに架けたる橋をいひ又、夢のかよふ道にもいひ、この世のことにもいへり、

ゆめのかしは

夫婦の寝ぬる圃の枕をいふ

ゆめまくら

夢に神人の靈が枕邊にあらはれて告ぐることをいふ

夢想藥

俗間にある神佛の夢想を受けて此藥をひろむといひて賣る藥をいふ廣益俗說辨に曰く

今按ずるに五雜俎云、金陵人有賣藥者、車載大士像、問病將藥、從大士手中過、有留於手、不下者、則許人、日獲千錢、大士手是磁石、藥有鐵屑、爾とあれば我朝のみにもあらずと見へたり、必ずかゝる藥などをみだりに用る事なかるべしといへり

夢殿

又夢堂といふ上宮皇太子菩薩傳に菩薩兼時入禪定、或時一日三日五日、于時世人不識禪定、但言太子入夢堂とあるものにして法隆寺にあり

ゆめみ草

櫻の異名にして藏玉集に「植ゑ置きてたとへにや見る夢見草、あすとも知らぬけふのいのちは」とあり

ゆめみ月

舊曆三月の異名にして秘藏抄に

櫻ちるはつせの山のゆめみ月嵐の花の雪のなかやど
とあるにて知るべし

ゆめみ鳥

てふの異名にして莊周の故事より來りしには非ざるか

ゆめ人

夢中にあらはるゝ人をいふ

ゆめとき

夢を判ずるものにて中古多くは女のなせる業なり

夢の精靈妙幢菩薩

この菩薩を念ずる時は戀しき人を夢に見ること古今榮雅抄に見ゆ即ち夢を司ど
る菩薩とせるなり謠曲にも出てたり

ゆめの つがのニ同ジ

山家集に次の句あり

よをのこすねざめの關ぞあはれなる

ゆめゆめ鹿もかくやなくらむ

夢市郎兵衛

強氣の男にて寛永中をさかりに經たる者老後頭をそりて相州田村の邊に隱遁し
けるが兄の身まかりしと聞き今は世にもひ殘す事なしとて佛間にこもり居て
食をたち念佛のみとなへて死しけるとなん、(近世奇跡考)

夢想兵衛

胡蝶物語の主人公にして、一生涯を夢と暮せる假設の名なり

夢想國師

足利直義高師直時代の高僧にして夢想國師御詠草は有名なるものなりその中の
一首を示さん

無輪廻中妄見輪廻といふ心を

山をこえ海をわたるとたとりつる夢路は聞のうちには有鳥、(群書類從九輯)

三 夢ノ内容摘録

(甲) 上古時代

形式	内容
<p>神靈ノ示現 (自然) (祈ル) (物ヲ賜フ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 神現ハレテ疫病ノ流行、國ノ治亂ハ我心ナリ、我ヲ祭ラバ疫止ミ、國治マリ、且海外ノ國歸伏セント告グ ● 神ニ祝ヲ充ツレバ皇子物言フニ至ラン(女) ● 御子ノ哭スル由ヲ告グ ● 人ヲ以テ河伯ヲ祭ラバ堤防成ラン、 ● 横刀ヲ授ケ之ヲ以テセバ國平カナラント告グ ● 臥機、絡罽、舞ヒ出デ、人ヲ歴ヒ驚カス織女神ノ所爲ナリ ● 赤黒盾、赤黒矛ヲ以テ神ヲ祭ラバ國治マラン、
<p>吉凶ノ前兆 (靈魂游行) 傳説(地名) 動物ノ夢 (地名) (傳説)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 山ニ登リ繩ヲ四方ニ張り粟ヲ食フ雀ヲ逐フ ● 山ニ登リ東ニ向ツテ八タビ廻リ槍ヲ弄シ刀ヲ撃ツ ● 暴雨面ニソ、ギ、錦色ノ小蛇頸ニ纏フ ● 磯窟(黄泉之坂)ニ至ルモノハ死ス ● 背上雪フリ、草生ズ、

佛ノ示現

● 金色ノ菩薩懷ニ入ル、(女)

(乙) 中古時代

(一) 奈良朝

形式	内容
<p>神佛ノ示現ニ屬スルモノ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 我國ハ古ヨリ、クマ人ヲ君トスルコト無シ横ザマノ心アル人ヲバ速カニ除クベシ (八幡神)(女) ● 御齡延ブ ● 大ナル鏡ヲ佛前ニカケテ映ル影ヲ禮セヨ、
<p>吉凶ノ兆</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 鎧兜ヲ來タル者百余人來リテ百川ヲ求ム (コレ正シクハ死者ノ怨靈ノ部ニ入ルベキモノナリ) ● 朱衣ノ老翁、日ヲ捧ゲテ皇子ニ授ク、他人腋底ヨリ出デ、之ヲ奪フ ● 劔、太刀、ヲ身ニ帶ブ (女) ● 匣ヲ開ク
<p>人ニ遇フ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 思フ人ニ遇フ
<p>情ノ感通</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 相思ノ情感通シテ實際ニ使者來ル

死者ノ靈	● 死者ノ靈ニ遇フ(智奴壯士、天智天皇)	三三六
植物ノ精	● 梅花語ル	
器具ノ精 (歌ヲ詠ス)	● 日本琴ノ精和歌ヲ詠ス	

(二) 平安朝

形式	内容
神佛ノ示現	<ul style="list-style-type: none"> ● (圓仁)、一大徳ヲ見ル、 ● 文章世ニ聞エタレバ他國へ遣ハスベシ、(後果シテ然リシトイフ)(紀長谷雄) ● (普賢菩薩)白象ニ乗リテ來リ法華持經者疑ヒヲ受ケテ矢ヲ射ラレタルニ代リテカク矢三筋ヲ身ニ受ケタリト告グ、 ● (虚空藏)化身シテ美人トナリ好色ノ若キ僧ヲハゲマス、 ● 神、國守ガ社ヲ建テ又神名帳ニ入レタル恩ヲ報ジテ、任滿チタルヲ再ビ國守トナスコトヲ應官ニ告グ、 ● 加葉佛、牛ト化シテ寺ノ建立ヲ助ク ● 男子産ルト告グ、 ● 神航路ヲ荒シテ佐理ヲ止メ社ニ額ヲカケシム、 ● 前生ニ佛師ニテ佛ヲ多ク作りシ功德ニヨリテ人ト生レ來ル、(女)

<p>(龍宮)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 行くサキノアハレナランモ知ラズ、サモヨシナシ事ヲ願フト告グ(清水ノ觀音)、 ● 鏡ノ一面ニ悲シキ影、一面ニ嬉シキ影ヲ寫シテ示ス、 ● 稻荷ヨリ賜ハルシルシノ杉ヨトテ物ヲ投ゲ出シ給フ ● 阿彌陀佛アラハレテ、コノ度ハ歸リテ後迎ヘニ來ント宣フ(女) ● 頭ヲトリ卸シテ額ヲ分ク(女) ● 腹ノ中ナル蛇、アリキテ肝ヲ食フ、之ヲ治センニハ面ニ水ヲ入ルベシ(吉凶ノ兆ナルガ如キモ祈リタル時ノ夢トセルヲ以テコ、ニ收メタリ)、 ● 光ラする心地こそせめ、照る月の雲かくれ行くほどを知らずば(賀茂神ノ歌ノ示現) ● 龍宮ヨリ召ス ● 船ヲ艤シテ待テ、雨風止マバコノ浦ニ寄セヨ、新タナル驗見セン、 ● 早く率テ渡レ、コレハ彼國ノ后ナレバ無事ニ渡ラン(龍王ノ示現) ● 今、一目、よそにやは見ん、この世には、さすがに深き中の契りを(佛ノ示現) ● 梵僧、我ハ賀春明神ナリ、汝ノ求法ヲ助クベシト告グ(最澄) ● 大毘盧遮那神變加持(一經卷)ハ眞ノ秘要ナリト告グ(空海) ● 攝州ニ寶山アリ汝何ソ住マザルト告グ(如意尼) ● 一串ノ青珠、四十五顆アルモノヲ授ケテ曰ク、コレ汝ガ命數ナリト(女) ● 吾東土ノ衆生ヲ利益セン願アリ我ヲ渡スベシ
--

偉人ノ母ノ夢

- 梵僧懷ニ入ル、(女)
- 劍刀ヲ吞ム、(女)
- 紫藤ヲ産ミテ其枝一天ニハビコル、(女)
- 大明神ニ袖ニ居サセ給ヒテ、男子ヲ産ムベシ、又ソレヲ取レト仰セラルト見テ驚キサグレバ作りタル龍アリ、(女)
- 劍ヲ吞ム、(女)
- 高僧來ツテ貞慶ト名乗り懷ニ入ル、(女)
- 人來ツテ金葉一顆ヲ與フ之ヲ取ツテ懷ニ入ル、(女)

吉凶ノ前兆
(最小ナルモノ)

- 針ノ穴ヨリ出デ、左市ノ中ニ立ツ又佛ノ瓔珞ヲ著ク (女)
- 妻子、狗鷹ニ殺サル、
- 紫雲立ツ
- 堀川院ヨリ矢ヲ東三條殿ニ射ル、
- 左ノ方ノ髪ヲ後ロヲ半バヨリ落ス
- 朱雀門ノ前ニ、左右ノ足ヲ西東ノ大宮ニサシヤリ北向ニテ内裏ヲ抱キテ立ツ、
- 双手ニ月ト日トヲ受ケ、月ヲ足下ニ踏ミ、日ヲ胸ニ抱ク、
- 右ノ足ノ裏ニ男かといフ字ヲ書ク
- 針ニはなだノ糸ヲ添エタルヲはし鷹ガ、前ニ落シタルガ、行者、君ノしたガハの頸ニ長ク縫ヒ付ケテ立ツヲ、鷹ハコノ針 求ムルヤウナルニ君ハ種

(最モ莊大ナルモノ)

人ニ遇フ

靈魂

死者ノ靈

- ノ上ニ置キテ更ニ知ラザルサマナリ、(女)
- 針ニ糸ヲスゲテ衣ニ縫ヒツク、
- 須彌ノ山ヲ右ノ手ニサ、ゲ、山ノ左右ヨリ月日ノ光、サヤカニサシ出デ世ヲ照ス、自ラハ山ノ下ノ蔭ニカクレテソノ光ニ當ラズ、山ヲバ廣キ海ニ浮ベ置キテ舟ニ乘リテ、西ヲサシテ漕ギ行ク
- コレヨリ遙カナル所ニ行クベケレバ相見ル能ハズトテ形見ニ弓一張ヲ留メ置ク(妻)
- 今コノ界ヲ去ツテ極樂ニ向フト告グ
- 思フ女ニ似タル人ニ遇ヒシニ現ニモ似ズ猛ク怒レルサマナリ
- 思ひあまり出にし魂のあるならん、夜深く見えばたまむすびせよ、
- 亡キ人アラハレテ歌ヲ詠ズ(女)
- 思ひさや、夢の中なる夢にても、かくよそくにならむものとは、
- 死者(魯賢、義孝)ニ遇フ死者詩歌ヲ詠ズ
- 時雨とは、ちぐさの花を散りまがふ、
- なにふる里に、袖ぬらすらむ、
- 昔契ニ蓬萊宮裏月、今遊ニ極樂界中風
- 故院、住吉ノ神ノ導キ給フマ、ニ京へ歸ルベシ、カク、ワビシキ浦ニ居ルハ少許ナル物ノ應報ナリ、云々ト告グ
- 故宮(父)物思ハシゲナルサマニテ、ホノメキ給フ

情ノ感通	<ul style="list-style-type: none"> ●横笛ノ聲ヲ尋ネテ柏木ノ靈ガ來リ歌ヲ詠ズ 笛竹にふきよる風のごとならば末のよ長さねに傳へなん ●惡靈、生前ニ嫉タカリシモノニ取付カントス ●我は汝が父の骸を守る鬼なり、(中略)今より後我夢を以て汝に告げ示さんといふ、その後は明日あらん事をば必ず前夜の夢に告げしとかや、
思念	<ul style="list-style-type: none"> ●女ノ怨ミ妬ム情ガ夫ノ夢ニ入り已レモ亦夢ニ見ル、(夫、妾ト共ニ臥シタル間ニ妻ガ來リテ怨言ヲ云フト見、妻ハ夫ト妾トノ寢タルサマ、ナドヲ違フコト無ク夢ニ見ル、思フコトガ夢ニ入ルモノニ屬スルモノナレドモ、怪シキ處アレバコ、ニ收メタリ) ●夫ハ妻ガ童女ヲ伴ヒ來ルト見、妻ハ知ラヌ人ト寢タルニ夫ノ歸リ來ルト見ル、 ●故郷のたびねの夢に見えつるは、怨みやすらんまたと訪はねば、 ●浮名ノ立チテカク苦シキ目ヲ見ルト女ガ言フ手馴ラシタル猫ノ來ルヲ宮ニ奉ラントテ率テ來ル
夢ニ見エシカト問フ	<ul style="list-style-type: none"> ●加茂川の、瀬にふす鮎のいを取りて、寐てこそ、明かせ夢に見えつや
植物ノ情	<ul style="list-style-type: none"> ●日の本の、みつの濱松、こよひこそ、我をこふらし夢に見えつれ、
動物ノ靈	<ul style="list-style-type: none"> ●猫、我ハ待從大納言ノ娘ノサルベキ縁アリテ生レ來レルナリトイフ ●蛇、我ハ華嚴ノ護神ナリトイフ

事ノ真相、未然ヲ示ス	<ul style="list-style-type: none"> ●女ノ姓メルコトヲ知リテ、何故ニ早ク言ハザルカト問ヘバ和歌ヲ以テ答ヘタリ ●行衛なく身こそなりなめ、この世をば跡なき水を尋ねても見よ
靈魂遊行	<ul style="list-style-type: none"> ●景色ノ佳ナル所ニ行ク、 ●大神宮、吾朝ハ神國ナリ、日輪ハ大日如來、本地盧舍那佛ナリ、此理ヲ悟リテ神ヲ崇メ佛法ニ歸依スベシ ●日ヲ見テ取ラントスルニ飛ンデ口中ニ入ル、 ●七重ノ塔ノ上ニ臥スニ三ノ日輪並ビ出デ身ヲ照ス ●海中ニ坐スニ日光懷中ニ入ル、

(丙) 近世時代

(一) 鎌倉室町時代

形式	<ul style="list-style-type: none"> ●頼朝八幡ニ參リタルニ、義朝ガ弓胡箆ヲ深ク納メ置ケ終ニハ頼朝ニ給ハントノ示現アリ又、打鮑六十六ヲ賜ヒ太キ處ヲ三口食ヒ、小サキ所ヲ盛安ニ投ゲ與フヲ取リテ懷中セリ ●嚴島大明神、平家ヨリ節刀ヲ召シ返サセテ、頼朝ニ賜フ
内容	<ul style="list-style-type: none"> ●神佛ノ示現

- 閻魔王宮ヨリ鬼、火ノ車ヲ以テ清盛ヲ迎ヘニ來ル(女)
- 觀音化身シ、白馬ニ乘リテ康賴ヲ迎ヘニ來ル、
- 熊野權現女ト化シ、成經、康賴ノ都ヘ歸ルベキコトヲ告グ、
- 嚴島神社ヲ修理シ崇メバ子孫繁昌セン
- 住吉明神化身シテ、靈笛ヲ返セ、若、然ラズハ法華經ヲ所望セントイフ、
- 地藏菩薩、西海ノ船ニテ忠快ヲ助ケンタメニ、左ノ手ノ折レタルコトヲ語ル、
- 賀茂明神寶劍ノコト、海士ニ仰セテ尋ネヨト告グ
- 榊ノ枝ニ立文ヲ着ケテ上書ニ萬里小路一位殿ヘト書キ中ニ速證無上大菩提トアリ
- 直衣着タル人ゆふしてニ
思ひ出づ、思ひぞいづる春雨に、涙とりそへ、ぬれしすがたを
ト書キタルヲ授ク
- 山王、猿ニ立文ヲ持タセテ來ルニ
頼めつゝ、この年月を重ねれば、くちせぬ契いかゞ結ばむ
トアリ返事ニ
心をば、かけてぞ頼むゆふだすき、七の社の玉のいがきに、
ト書キテ參ラセタリ
- 御幣紙、打まきヲ賜フ、
- 熱田神、汝、國司ニ捕ハレシハ、僧アリテ法樂セントセシヲ、汝其僧ヲ追

- ヒタリシ答ヲセンタメニ國司トナリ來レルヲ以テ汝ガ赦サレンコト我ガ力及バスト宣フ
- 汝ハ日高河ノ魚ナリシガ南無大悲三所權現ト奉唱スル聲ヲ聞キテ、人身ヲ受ケタリ、
- 寶珠ヲ賜フ
- 賀茂神、日本ヲ去ツテ他所ニ渡ル
- 十二因縁心裏空ノ句ヲ受ク、
- 競馬ニ勝ラシハ、賀茂大明神ノハカラヒナリ、
- 高僧八人來リテ加持ス
- 我ハ新羅明神ノ眷屬ナリコノ寺ヲ守ラン爲ニ來ル、僧曰ク佛像、堂塔灰燼トナルニ何ヲ守ラントスルカ、
- 男子ヲ産ムベシ、
- 汝ハコノ家ニ居ルトモ子孫ハ住ムベカラズ、
- 此病ハ醫ニツクベシ、我ハ力及バス、
- 思フ女ニ遇ヒテ(神ノ化現)
あたつみの、そことも知らずわびぬれば、住吉とこそあまはいひけれ
トノ歌ニテ思フ人ノ所在ヲ告グ
- 少將、困ミ臥シタル所ニ姫君尋ネ行キタレバ
たづねかね、深き山路にまよふ哉、君がすみかをそこと知らせよ
ト詠ミタリ、

- コノ二ノ夢ハ二人同時ニ見タルモノニテ情ノ感通セルモノナレドモ今ハ神ニ祈リテトアルニヨリテ神佛ノ示現ノ部ニ入レタリ
- 男子ノ女子ラシク女子ノ男子ラシキハ天狗ノ所爲ナリ、事ナホルベシ、戀フル女ノ所在、素性ヲ告グ
- 玉ヲ左ノ袖ニ移ス
- 父敦盛ニ遇ハント思ハ、津ノ國コヤノ生田ト尋ヌベシ、
- コガネノ箱ヲ賜フヲ袂ニ納ム、
- 汝ガ尋ヌル人ハ、恨ミ深クシテ身ヲ捨テ、今ハ此世ニ無シトテ和歌ヲ詠ミタリ

しらす露はもとの雫と成にけり

やとりし草の原を教へん

- 生身ノ普賢ヲ見ント思ハ、神崎遊女ノ長者ヲ見ルベシ、
- 住吉ノ別當ガ許ニ、隆願トイフ僧、御宿直ノ爲ニ参リタル由ヲ申ス
- (附記) 『春日権現記』ニ出デタルモノ、二三ヲコ、ニ記ス
- 正三位季能ノ夢に恐ろしげなる僧一人來りて近づかんとする程に人の聲するを家の人たづぬるに使春日の社より來れりといふ聲を聞きて僧の顔色變じて逃げ去りぬ、
- ある人の夢にみる様、門の前を神人三人走る、何ごとぞといふに、春日の大明神の平中納言(神人ヲ殺シタルニヨリ)を召す使なりといひけり云々
- 大和國平群郡夜摩郷に竹林殿あり、春日大明神影向の靈地なり、昔、藤原

光弘の夢想に貴女來りてこゝは子孫繁昌すべき所なりとのたまふ、如何なる人かと問へば

我やどはみやこのみなみ鹿のすむみかさの山のうさくものみやといひて見えずなりぬ (春日権現験記)

吉凶ノ前兆

- 木ノ枝、南ニ出デタルガ特ニ繁レル下ニ御座ヲ設ケ百官其下ニ列座ス、童子二人來リテ、一天下ノ間、御身ヲ隠サルベキ所ハコノ座席ノミ、コレ主上ノ爲ニ設ケタルモノナリト言ヒテ天ニ上レリ
- 義貞高サ三十丈バカリノ大蛇トナリテ地ニ伏ス、高經之ヲ見テ兵ヲヒキテ逃グ
- 重代相傳ノ八領ノ鎧、辻風ニ飛散ス
- 矢倉ガ岳ニ腰ヲ掛ケシニ、一ホンバウハ、黄金ノたいへんざヲ抱キ、實近ハ壘ヲ敷キ、成綱ハ銀ノ折敷ニ、金ノ盃ヲ据へ、盛長ハ、銀ノ銚子ニ盃ヲ参ラスルニ頼朝三度飲ミテ、箱根ニ参詣セシニ、左ノ足ハ、ソトノ濱ヲフミ、右ノ足ハ鬼界島ヲフミ、双ノ袂ニハ日月ヲ宿シ、小松三本頭ニ戴キ、南向ニ歩ム、
- 空ヨリ山鳩三羽來リ頼朝ノタブサニ巢ヲクヒ子ヲ産ム、
- 御前ヲ追ハレ門外ニ差出サル、
- 兩眼抜ケテ中ニ廻リテ失セヌ、
- 冠シタル者來リ、劔匣ヲ入レ奉ルニツキ、用意セヨ、

<p>人又鬼ニ遇フ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 姫君ノ懐ヨリ、月出デ光クマナキヲ初瀬ノ別當受ケテ内へ參ル、(女) ● 美女、散リマガヘル木蔭ニヤスムニ花再ビ咲キ降りカ、ルヲ袖ニ包ミテ去ル、
<p>死者ノ靈</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 糸ノツキタル針ヲ直衣ノ袖ニサス、 ● カク尋ネ遇ヒタル嬉シサハコノ世ナラデモ、ナドカナド言ヒテ泣キテ歌ヲ詠ミタリ、 ● 磯枕、心づくしのかなしさに、波路わけつゝ、われも來にけり、

<p>思念</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● タマアレ如何ニモシテ相見ント云フト思フ ● 螺、小キ尼トナリテ泣キ悲ム、蛤モ亦夢ニ見エタリ ● 鴛鴦ノ雌ガ雄ヲ射殺サレタルコトヲ怨ム ● 姫宮ノ所在ハ須彌山ニ在リト告グ ● 後醍醐帝、龜山ノ舊跡ニ行幸アリテ群臣ト宴セサセ給フ ● 冥土ニ赴キタルニ、侍從大納言行成ヲ召サルベキ由、ソノ沙汰有リケレバ、アル冥官云フカノ行成ハ世ノ爲、人ノ爲イミジク正直ノ人ナリ、暫ク召サ
<p>動物ノ靈</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 爲家、阿佛尼ノ草ノ枕ニ立チテ見ユ ● ある人の夢に、その正體もなきもの影のやうなるが見えけるを、あれは何人ぞと尋ねければ紫式部なり、とらごことをのみ多くしあつめて、人の心を惑はす故に、地獄におちて苦を受くることいと堪へがたし、源氏の物語の名をぐして、なもあみだ佛といふ歌を巻毎に人々によませて、我がくるしみを訪ひ給へといひければ、いかやうに讀むべきにかと尋ねけるに ● 桐壺に迷はむ間もはるばかりなもあみだ佛と常にいはなむ
<p>事實ノ真相未然ヲ示ス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 安德帝、及ビ平家一門ノ月卿雲客並ビ居テ二位尼曰クコソ龍宮城ニテりうちく經ニ見エタリ後世ヨクノ吊ヒ給へ、 ● 我ハ宇治ニテ空シクナリシ若草ナリ、一心ナク吊フニヨリテ變生男子ト生レタリ
<p>靈魂ノ遊行</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 重盛、八葉ノ蓮座ニ左ノ足ヲアゲテ登ラントスルニ一門ノ惡行ノタメニ鬼神ノタメニ引落サレタリ、如法經ヲ書寫シテ我後世ヲ助ケヨトイフ ● 平忠正、源爲義ヲ大將軍トシテ崇徳院ヲ奉ジ都ニ入レ奉ルベキ評定ヲナシ大政入道ノ宿所ヘ入レ奉ル、 ● 上人速カニ成佛スベカリシヲ、由ナキ忘念ヲ起シテ今一度人界ニ生レ帝王ノ位ニ至リテ我寺ヲ助ケント思ヒシニ果シテ然リシナリ、

天女	<p>ル可カラズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自ラハ大王ノ手ニカ、リ空シクナリシモ、御身故ノコト、命ハ惜シカラズ、二世ノ契リハ朽セシト涙ヲ流ス、
鬼神	<ul style="list-style-type: none"> ●鬼神文時三品ノ家ノ前ヲ拜シテ通り、瀧山雲暗季將軍之在、家ト作リタル人ノ家ヲバ無禮ニテ過グベカラズトイヘリ
神佛ノ靈驗	<ul style="list-style-type: none"> ●水精ノ錫杖ヲ召サレツ、九條錫杖ヲ誦セサセ給フニヨリ、久シク保タセマシマス ●懺法ノ聲ニ驚キテ、六根ヲ惱マス鬼六人、泣ク々々罷リ出ヅ(女) ●美シキ女ヲ強ク取り止メシニ引放シテ通ル、 ●數多ノ武士、此處ニハ唯識論在リ狼藉アルベカラズトテ去ル、 ●僧ヲ召シテ密教ヲ受クルニ傍ニ口ニ嚙ノツキタル法師二三人アリ、角振ノ明神ハ在ハサヌカトイフ聲ニツキテ春日神主來リケレバ、皆去リヌ、
死者ノ靈 (謡曲)	<ul style="list-style-type: none"> ●八島合戦ノ狀 ●清經入水ノ當時ニ於ケル心事、 ●頼政、平等院ニテノ最後ノ狀、 ●項羽、虞氏ト別レノ狀、 ●敦盛、子ニ遇ウテ、源平合戦及ビ最後ノ狀ヲ語ル ●亡キ母ノ靈親子ヲヒキ合セテ冥土ニ歸ル、 ●富士野ノ狩場ニテ仇祐經ヲ討ツ時ノ狀

植物ノ精	<ul style="list-style-type: none"> ●當麻曼陀羅ヲ織ル時ノ狀、 ●夕顔ノ妄執、僧ノ吊ヒニテ解脱ス、 ●雲井雁ノ嫉妬心佛果ヲ授カリ成佛ス、 ●姉妹ノ海士ノ妄執、回向ニヨリ成佛センコトヲ願フ、 ●老松ノ靈、天滿宮ノコトヲ語ル、 ●柳ノ精、法力ニヨリテ成佛ス、 ●忠度ノ「行暮れて」ノ歌ノ千載集ニ載リシ事情ヲ語ル、 ●夕顔ノ花ノ精、源氏トノ關係ヲ語ル、
神佛ノ示現	<ul style="list-style-type: none"> ●天神、我ヲ信ゼバ、安樂寺ニ參レト告グ、 ●工女二人綾錦ヲ織ル、 ●鬼ニナリタクバ、赤衣ヲ着顔ニ丹ヲ塗り、頭ニ鐵輪ヲ戴キ三足ニ火ヲ燈シ、怒ル心ヲ持ツベシ、 ●我子ニ遇ハント思ハハ、三井寺ニ參レ、 ●木樨樹ノ木ノ實ヲ數珠トシ念佛百萬申サバ、往生疑ヒナシ、 ●松ノ枝ニ花ヲツケテ賜フ、 ●汝多年、發心人ニ越エタリ、我汝ガ命ニ替リ、王難ノ災ハ遁ルベシ、
神、人ト化ス	<ul style="list-style-type: none"> ●三輪明神、女實僧都ヲ訪ヒ、神樂ヲ奏ス、
吉凶ノ前兆	<ul style="list-style-type: none"> ●富士山ニ登リシニ周圍ニ雲霧ナク、麓ニ櫻、梅花美シク咲キタリ、

(二) 徳川時代

形式	内容
神佛ノ示現	<ul style="list-style-type: none"> ● 經錦舎、神ヨリ、汝ガ學ブ道モ成就セントノ示現ヲ受ケ、且ニツノ泉ノ壺ト、冠、唐衣ヲ授ケラル、 ● 軍ハ二千里ヲ出デ西ニ利アリト夫婦トモニ同一ノ示現ヲ受ク、 ● 天神阿武隈ノ松ヲ見ント思ハ、氣比ノ濱邊ニ行クベシト示現ス、 ● 天神、狩野トイフ繪師下ルベシ阿武隈ノ松ヲ傳授セヨ、父ガ出世ノ種ナラント示現ス、 ● 神女、面ヲ犯シ親ヲ諫メテ、旅客二人ノ疑ヒヲ受ケテ脱得ガタキヲ放還セシムベシ、然ラズバ親モ夫モ非命ニ死ナント告グ、 ● 姫神水、戯水馬ノ一術ヲ教フ、 ● 母ノ命日ニ必死ノ人ヲ二個マデ救ハ、追薦冥福ノヨスガニナラン、 ● エビス神、福ヲ獵師ニ授ケントスレドモ人心セハシク、我イフコトノミ言ヒテザラ、立行ケバ何ヲイヒ聞カス間モナシ遅ク參リシ汝ガ仕合せナリ云々ト告グ、 ● 貧乏神、祭ラレテ嬉シガリ貧饒ヲ二代長者ノ奢リ人ニユヅリ忽チ繁昌サスベシト告グ、
吉凶ノ前兆	<ul style="list-style-type: none"> ● 婦ハ夫ニ切ラレ、夫ハ又切腹シ、僧出デ、念佛申ス

死者ノ靈	<ul style="list-style-type: none"> ● 天狗ノ鼻ニ取付キテ女護島へ渡ル ● 黄ナル雀、竹ヲ啜ヘテ屋ニ巢ヲクヒシニ、白キ鳩、小松ヲ啜ヘテ雀ノ巢ニ運ブ ● 老翁、咽ニ釣針アルヲ取リクレヨトイヒシヲ助ケシニ玉一双ヲ奉リ其儘鯉ノ形トナリ去ル、 ● 白象胎内ニ飛入ル、 ● 日輪懷ニ入ル ● 三方ニ生首アリテ其首ニ何番ト記シアリ ● 土ノ鼠、木ノ馬腹ヲ喰破リ馬死ス ● 逢坂ノ關路悉ク白砂ナリ
<ul style="list-style-type: none"> ● 冤罪ニテ殺サレシ娘父ノ夢ニアラハレテ和歌ヲ詠ジ實ヲ告グ ● 死者ノ靈、アラハレテ生存中ノコトヲ語ル、 ● 死者ノ靈生存時ノ武者振ニテ死者ノ屍ノ所在ヲ告グ ● 父ノ亡靈、子ノ夢ニアラハレテ遺言ニ違ヒシヲ責メ領ヲカム ● 亡靈アラハレテ俳諧ノコトヲ語ル、 ● 浦島太郎、前生ヲ語ル、 ● 石川丈山ノ亡靈、生存中ノ進退ヲ語ル ● 姉妹嫉妬ノ念アラハレテ夫ヲ思フタメニ龍宮ニ入りテ日ノ御座ノ劍ヲ取り來ル 	

附 録

靈魂遊行	動物ノ靈	思念	植物ノ精
<ul style="list-style-type: none"> ●美シ女、男ノ寢肌へ入り妾ハ獵師ノ妹ニテ和郎ノ肌ニ舐ラツケ込ムトイフヲ、入レジ入ラント争フ、 ●男ノ靈魂アラハレテ、容貌ノコトヲ云々ス、 ●朝鮮ニ到ル、 ●七歳ノ兒、郷ニ歸リ兩親ニアフテ日本ノコトヲ問ハル ●冥土ニ遊ブ ●夢想兵衛紙鳶ニ乗リテ遊行ス、 ●神社ノ森ノ邊ニ至リ神木直立セルヲ見テ拜ス ●夜候火櫓ニ登リテ詩句ヲ得タリ 	<ul style="list-style-type: none"> ●犬七頭アラハレシニ又一隻ノ巨大走り來レルヲ以テ之ヲ搔抱クニ我身モ忽チ犬トナル、 ●池中ニ龍アリテ、泳ギ又潜ムヲ見ル、 ●蓬萊山ノ洲崎ノ海老ノ髭ニ金帯一筋カ、リテ春風ニ飜ル、又美面鳥飛ビ來ツテ、御身ノ父、稀ニ彼地ニ渡リ女王ト語り再ビ歸リ來ラズト告グ一ノ巻物ヲ左ノ袂ニ投入ル、 ●猫ト鼠トアラハレテ各物語リ俗ノ説法ヲ聽キテ感ス 	<ul style="list-style-type: none"> ●曾我十郎五郎父ノ仇ヲ討ツコトヲ見ル、 ●賊四人押入りテ白刃ヲ提ゲテ住持ノ室ニ案内セヨト責ム ●大根ノ精アラハレテ俳諧ノコトヲ語ル、 	

事實ノ真相及ビ未だ然ヲ示ス	仙人
<ul style="list-style-type: none"> ●犬塚信乃、旅宿ニ索ネ行キテ最大恨ミヲ言ヒ解カントス ●頼朝兵ヲ擧グ義經奥州ヨリ來リ遂ニ平氏ヲ亡ボス ●富士石ノ所在ヲ告グ ●富士山ニ登リ一堂ノ扁額ニ九十三ト書ケルヲ見ル ●逆心ヲ起シ尊氏ヨリ相傳ノ印判ヲ賺取り、又侍女ヲ瞞シ太刀ヲ奪ハセ、左衛門ニ切腹サヒント謀ル、 ●親ノ靈魂、里見殿ニ大敵攻來ルヲ告グ ●獵ノ隊ニ在リテ暴虎ヲ斃シ、ヲ示ス 	<ul style="list-style-type: none"> ●仙翁、行ク先ヲ知ラス ●浦島仙人、昔ヲ語り、飛行ノ方ヲ授ク、

閣下燈前夢、巴南城底游、
 覓花來渡口、
 尋寺到山頂、江色分明綠、
 猿聲依舊愁、
 禁鐘驚睡覺、惟不上東樓、

(白居易)

門松は今朝の初夢合せ哉、

(佐夜中山英)

手枕の月傾きて夢もなし。 (印孝)

松風近き秋の山もと。 (宗砥)

あふとみる夢てふ物そうき人の。 (法眼綱志)

心の外のなさけなりける。 (法眼綱志)

よしあしの夢をまことしたのみてぞ。 (權律師圓俊)

現なき世に身は迷ひける。 (權律師圓俊)

夢路をばせきもる神やゆるすらん。 (紀俊文)

ぬるよに通ふあふ坂の山。 (紀俊文)

夢路をぞはかなき世には頼むべき。 (後成)

思ひあはする方もありけり。 (後成)

夢とのみ過ぎにし方は思ほえて。 (後成)

覺めてもさめぬ心地こそすれ。 (後成)

うたゝねの夢に見えつる七十年の。 (宗宣親王)

昔をながく何思ひけん。 (宗宣親王)

思ひつゝたゞうたゝねの夢のまに。 (宗宣親王)

いづ山こえて花を見つらん。 (師兼)

夕すゞみねやへも入らぬうたゝねの。 (師兼)

夢路ほどなく明くる東雲。 (全)

ひとりねは秋の夜長き夢の中に。 (全)

いくたび人の夢にみえけん。 (全)

さえ佗びて寝るともなさに、いかにねて。 (全)

いかに見えつる夢路なるらむ。 (全)

死別己香聲、生別常惻々、江南瘴癘地、

逐客無消息、故人入我夢、明我長相憶、

恐非平生魂、路遠不可測、魂來楓林青、

魂返關塞黑、今君在羅網、何以有羽翼、

落月滿屋梁、猶疑見顏色、水深波浪濶、

無使蛟龍得。 (杜子美)

Dreams are but interludes which fancy makes,

When monarch reason sleeps, his mimic wakes:
Compounds a medley of disjointed things,

A mob of cobbles, and a court of Kings:

Light fumes are merry, grosser fumes are sad;

Both are the reasonable soul run mad.

Dryden: "Cock and the Fox"

* * * * *

明治四拾年一月二十日印刷
明治四拾年二月一日發行

夢

定價金八拾錢



校閱者 芳賀矢一

著者 石橋臥波

發行者 大葉久吉

東京市日本橋區本石町三丁目七番地

發行者 吉岡平助

大阪市東區備後町四丁目七十八番地

印刷者 青木弘

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

發兌

東京市日本橋區本石町三丁目
大阪市東區備後町四丁目

寶文館

刷印場工一第舍英秀

工 9X-10

寶文館發兌文學類書

文學博士 青木武助著	文學士 村川堅固著	文學士 高桑駒吉著	文學士 高桑駒吉著	文學士 藤井宇平著	文學士 朝永三十郎著	伊賀駒吉郎著	伊賀駒吉郎著	文學博士 福來友吉著	文學士 守月 晃著	文學士 吉田靜致著	文學士 朝永三十郎著	石橋臥波著
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
日本大歷史	西洋歷史講話	東洋歷史講話	東洋大歷史	人生及經濟	哲學辭典	心理學要義	心理學原論	心理學講義	倫理通論	倫理學要義	哲學綱要	素人宗教觀
全壹冊	全壹冊	全壹冊	全三冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全三冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊
定價金貳拾五錢	定價金貳拾五錢	定價金貳拾五錢	定價金壹圓貳拾錢	定價金六拾錢	定價金貳圓參拾錢	定價金貳拾五錢	定價金五拾錢	定價金九拾錢	定價金九拾錢	定價金壹圓貳拾錢	定價金壹圓貳拾錢	定價金參拾錢
近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊

寶文館 發兌元 東京市本區橋本區石町三丁目 東京市本區橋本區石町四丁目